

CA Business Service Insight

インストール ガイド

8.2



このドキュメント(組み込みヘルプ システムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」)は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社(以下「CA」)により随時、変更または撤回されることがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本ドキュメントの全部または一部を複製、譲渡、開示、変更、複本することはできません。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報です。ユーザは本ドキュメントを開示したり、(i) 本ドキュメントが関係する CA ソフトウェアの使用について CA とユーザとの間で別途締結される契約または (ii) CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に、本ドキュメントを使用することはできません。

上記にかかわらず、本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本ドキュメントの制作者は CA です。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2012 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての製品名、サービス名、商号およびロゴは各社のそれぞれの商標またはサービスマークです。

CA への連絡先

テクニカル サポートの詳細については、弊社テクニカル サポートの **Web** サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

目次

第 1 章: 概要	11
対象読者	11
パッケージコンテンツ	11
 第 2 章: 前提条件	 13
バックアップ	13
サーバソフトウェアの前提条件	13
データベース サーバの前提条件	14
アプリケーション サーバの前提条件	16
Web サーバの前提条件	19
ハードウェア前提条件	23
クライアントソフトウェアの前提条件	25
 第 3 章: 標準新規インストール	 27
開始前の確認事項	27
サードパーティ CD	28
サービスの停止	28
インストールおよび地域の設定	29
複数のサーバへのインストール	30
新しいデータベースの手動作成	32
インストール ダイアログ ボックス	33
標準インストール ウィンドウ	34
サーバ インストール - 標準	36
サーバ数 (トポロジ)	36
64 ビット サーバの制限事項	38
CA Business Service Insight サーバのインストール	40
クライアント インストール - 標準	45
コンポーネント	45
CA Business Service Insight クライアントのインストール	46
インストール後の作業 (新規インストール時)	47
言語の選択	53

SMILoader	53
第 4 章: 旧バージョンからのアップグレード	55
開始前の確認事項.....	56
データベースジョブの再編成	59
サービスの停止.....	60
インストールおよび地域の設定	60
CA Business Service Insight へのアップグレード	61
アップグレードダイアログボックスおよびその設定.....	64
タイムゾーンツール	67
インストール後の作業(アップグレード時)	68
アップグレードログファイル.....	70
第 5 章: パスワード更新ユーティリティ	71
第 6 章: カスタム インストール	72
カスタム インストール ダイアログ ボックス	74
第 7 章: 高可用性	77
概要	78
データベース サーバ	78
アプリケーション サーバ	79
Web サーバ.....	80
新規インストール	81
前提条件.....	81
アプリケーション サーバのインストール。	81
Web サーバのインストール	82
アダプタ サーバのインストール	82
設定.....	82
旧バージョンからのアップグレード	88
アプリケーション サーバのアップグレード	89
Web サーバのアップグレード	90
アダプタ サーバのアップグレード	91
サーバの設定	91
追加情報	97

高可用性を構成する設定可能なパラメータ	97
既知の問題	98
 第 8 章: サイレント インストール	 99
インストールおよび地域の設定	100
サーバのサイレント インストール	100
サーバ応答ファイルの記録	101
会社名の変更	103
ディレクトリの変更	103
機能の変更	104
ユーザ名とパスワードの変更	105
データベース パラメータの変更	106
再起動オプションの変更	107
サイレント モードでのサーバのインストールの実行	107
インストール後の作業	107
アプリケーション サーバ サイレント インストール (アップグレード)	109
サーバ応答ファイルの記録	109
マイグレーションの実行	111
サーバ名の変更	111
スキーマ ユーザ名の変更	111
スキーマ パスワードの変更	112
システム パスワードの変更	112
ユーザ名の変更	112
パスワードの変更	113
クライアントのサイレント インストール	113
クライアント応答ファイルの記録	114
デスティネーション パスの変更	115
サイレント モードでのクライアントのインストールの実行	116
 付録 A: MS Word アドイン	 117
MS Word アドインのインストール	117
 付録 B: Windows 2008 Server R2 に関する重要な情報	 119
インストールおよび地域の設定	119
前提条件	119

IIS (Internet Information Services) のインストールと設定	120
付録 C: Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストール	121
Linux インストール	121
DB サーバへのメディアのダウンロード	121
TNSNames のセットアップ	122
セットアップ	122
インストール サブスクリプトの修正	122
インストール	123
第 9 章: インストール後に必要な作業	125
1 層インストール	125
多層インストール	126
サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる	126
APP コンポーネントと WEB コンポーネントを異なるサーバにインストール	127
3 層インストール: 詳細設定	128
MSMQ 構成	128
ACE2 構成	129
ダッシュボード: アドレス	130
ダッシュボード: 現在のステータス	131
レジストリ キー	132
言語の選択	133
付録 D: ポートおよびプロトコル	135
アーキテクチャ	136
通信の詳細	138
ACE2 および Oblisync	141
その他の通信 (オプション)	142

付録 E: CA Business Service Insight のアンインストール	145
付録 F: CA Technologies のデータベース オブジェクト用の命名規則ポリシー	147
索引	153

第 1 章：概要

このガイドでは、新規に、またはアップグレードとして **CA Business Service Insight** をインストールするための手順を説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[対象読者](#) (P. 11)

[パッケージコンテンツ](#) (P. 11)

対象読者

このガイドは、**CA Business Service Insight** のインストール、またはアップグレードを行う担当者を対象にしています。

パッケージ コンテンツ

CA Business Service Insight をインストールする前に、このテーブルに示される必要なすべてのフォルダがあることを確認します。

フォルダ名	説明
サーバ	サーバ インストール フォルダ。
クライアント	クライアント インストール フォルダ。
前提条件	インストールまたは CA Business Service Insight へのアップグレードの前に必要とされるファイルが含まれるフォルダ。
セットアップ データベース	CA Business Service Insight データベース インスタンスのインストールまたはアップグレードに使用されるファイル、およびその他のデータベースツールが含まれるフォルダ。セットアップ フォルダを参照してください。
サイレント	サイレント インストール応答ファイルの例が含まれるフォルダ。

第 2 章：前提条件

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバおよびクライアントコンピュータ用の前提条件のリストを示します。CA Business Service Insight をインストールする前に、すべての前提条件を満たす必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[バックアップ](#) (P. 13)

[サーバソフトウェアの前提条件](#) (P. 13)

[ハードウェア前提条件](#) (P. 23)

[クライアントソフトウェアの前提条件](#) (P. 25)

バックアップ

システムを元の状態に戻すことができるように、データベース、アプリケーション、および Web サーバのバックアップを実行することを推奨します。

バックアップの目的は、インストール中に問題が発生した場合に、システムを迅速かつ安全に元の状態に戻すことができるようにすることです。

バックアップ

1. CA Business Service Insight サーバ前提条件のインストールを開始する前に、お使いのサーバ(データベース、アプリケーション、または Web)をバックアップします。
2. CA Business Service Insight のデータベース、アプリケーション、または Web 機能のインストールを開始する前、および、前提条件のインストールが完了した後に、お使いのサーバ(データベース、アプリケーション、または Web)をバックアップします。

サーバソフトウェアの前提条件

以下のセクションでは、データベース、アプリケーション、および Web サーバのソフトウェア前提条件について説明します。すべてのサーバがすべての前提条件に適合していることを確認します。

データベース サーバの前提条件

このページの表に、最低限必要なデータベース、バージョン、文字セット、サーバ前提条件の一覧を示します。

RDBMS ベンダー/ データベース	データベース バージョン/ エディション	データベース ソフトウェア のバージョン	プラットフォーム	文字セット*
Oracle	Oracle 10 Standard、 Enterprise、または RAC	10.2.0.4	Oracle 認定のオ ペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252
	Oracle 10 Standard、 Enterprise、または RAC	10.2.0/5	Oracle 認定のオ ペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252
	Oracle 11 Standard、 Enterprise、または RAC	11.1.0.7	Oracle 認定のオ ペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252
	Oracle 11 Standard、 Enterprise、または RAC	11.2.0.3	Oracle 認定のオ ペレーティング システム	AL32UTF8 WE8MSWIN1252

データベース インストール スクリプトは、以下のプラットフォームでテストされました。

- Microsoft Windows 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)。
- Microsoft Windows 2008 (32 ビットおよび 64 ビット)。
- Microsoft Windows 2008 R2 Enterprise エディション SP1 (64 ビット)。
- Unix-Sun Solaris 10.5。
- Linux

**** 注:** Microsoft Windows 2003 のみでテストされました。

注: 単一層インストールでは、インストールされている Oracle 64 ビット サーバを使用する場合、Oracle 32 ビット クライアントをインストールする必要があります。

注:

- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバ、Oracle クライアント、およびデータベース接続設定コンポーネント (TNSnames.ora、listener.ora など) が正しくインストールおよび設定されていることを確認します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成するインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
 - TNSnames.ora はすべてのサーバ上に存在する必要があります
 - Listener.ora は DB サーバ上に存在する必要があります。
- サーバが 64 ビットの場合でも、32 ビット版の Windows 用 Oracle クライアントをインストールしてください。

注: 新しいデータベースでは、AL32UTF8 または WE8MSWIN1252 を選択できませんが、AL32UTF8 文字セットを使用することを強く推奨します。

注: 他のプラットフォームにデータベースをインストールすると、スクリプトの調整が必要な場合があります。

データベース サーバのその他の前提条件

インストール処理を開始する前に、データベース サーバに少なくとも 10GB の空き容量を確保する必要があります。

重要: インストールを完了してデータベースを完全にインストールするには、データベース サーバに十分な空き容量を確保する必要があります。

Oracle がサポートされるプラットフォームの詳細については、
<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html> で Oracle のオンラインドキュメントを参照してください。

アプリケーション サーバの前提条件

このページの表に、アプリケーション サーバをホストするためにサポートされているオペレーティングシステムプラットフォームの一覧を示します。

OS プラット フォーム	OS バージョン	パッチ レ ベル	OS 言語パック
Microsoft	Windows 2003 Standard または Enterprise エディ ション	SP2	要求される地域の設定による
	Windows 2003 Standard または Enterprise エディ ション	SP2	要求される地域の設定による
	Windows 2008 Standard または Enterprise エディ ション	SP2	要求される地域の設定による
	Windows 2008 R2 Enterprise エディション	SP1	要求される地域の設定による

注:

- Windows 2003 Standard または Windows Enterprise エディション SP2 については、CA Business Service Insight は 32 ビット バージョンをサポートします。
- Windows 2008 Standard または Windows Enterprise エディション SP2 については、CA Business Service Insight は 32 ビットおよび 64 ビット バージョンをサポートします。
- Windows 2008 Enterprise エディション R2 SP1 については、CA Business Service Insight は 64 ビット バージョンをサポートします。
- この製品は IP バージョン 6.0 トレラントです。
- 3 台以上のサーバにインストールする場合、アプリケーションおよび Web サーバの時刻を同期してください。
- Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 をインストールする必要があります。
- この製品は、サービスとエンティティ専用アカウントが必要です。
 - CA Technologies では、インストール時にローカル アカウントの代わりに CA Business Service Insight エンティティ用のドメイン アカウントを使用することを推奨します。同じアカウントがすべての CA Business Service Insight サーバに使用される必要があります。
 - 使用されているいずれのアカウントも、ローカル管理者グループのメンバーである必要があります。メンバーのユーザ名とパスワードを記録しておいてください。

注:

- CA Business Service Insight をインストールする前に、「地域の設定」セクションを参照してください。
- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバ、Oracle クライアント、およびデータベース接続設定コンポーネント(TNSnames.ora、listener.ora など)が正しくインストールおよび設定されていることを確認します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成するインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
 - TNSnames.ora はすべてのサーバ上に存在する必要があります
 - Listener.ora は DB サーバ上に存在する必要があります。

注: データベース サーバへの接続を確立するには、CA Business Service Insight をインストールする前に Oracle クライアントおよび Oracle OLEDB ドライバをインストールする必要があります。

Oracle OLEDB のバージョンは、Oracle データベース ソフトウェアのバージョンと同じかそれ以降である必要があります。TNSname は、TNSnames.ora ファイルで定義済みである必要があります。コマンドラインから TNSping [CA Business Service Insight データベース名] を実行するか、または Oracle Net Configuration Assistant を使用して定義を確認します。

- Oracle OLEDB Provider がアプリケーション サーバにインストールされている必要があります。
 - 既存の Oracle クライアントに Oracle OLEDB Provider を追加する場合、既存の Oracle ホームにインストールします。Oracle OLEDB Provider へのインストールに関するサポートについては、CA Technologies サポートチームにお問い合わせください。
 - CA Business Service Insight アプリケーション サーバ NLS_LANG 設定は、データベース NLS_LANG 設定と同一である必要があります。
- 以下の Oracle クライアント パッチ セットを使用します。
 - Oracle データベース ソフトウェア バージョン 10.2.0.4 用のパッチ セット 34。(P9393548)
 - Oracle データベース ソフトウェア バージョン 11.1.0.7 クライアント用のパッチ セット 24。(P9384493)
- アプリケーション サーバ メモリは少なくとも RAM が 2GB である必要があります。

注: TNSnames.ora がすべてのサーバに存在することを確認します。

注: MSMQ は以下のポートを使用します。

- TCP: 1801
- RPC: 135、2101/2112、2103/2114、2105/2116
- UDP: 3527、1801
- JDK 1.6.16 環境 (32 ビット)

注: ACE2 では、アプリケーション サーバとして JBoss が使用されます。次の ACE2 ポートが、JBoss が実行されるサーバに対応できることを確認します: 4073、1298、1299、8283、4744、4645、3728、19201、1361、1363、8293、8280、1300、5546、4657。

Web サーバの前提条件

このセクションでは、CA Business Service Insight <ver> をインストールする前に必要となる Web サーバの前提条件について説明します。

オペレーティング システム

この表に、Web サーバをホストできるオペレーティング システム プラットフォームの一覧を示します。

OS プラットフォーム	OS バージョン	パッチレベル	Web サーバ	OS 言語パック	追加設定
Microsoft	Windows 2003 Standard または Enterprise エディション	SP2	IIS 6.0	要求される地域の設定による	IIS (Web サーバ)
	Windows 2008 Standard または Enterprise エディション	SP2	IIS 7.0	要求される地域の設定による	IIS 6 互換モードを備えた IIS (Web サーバ)
	Windows 2008 Server R2 Enterprise エディション	SP2	IIS 7.0	要求される地域の設定による	IIS 6 互換モードを備えた IIS (Web サーバ)

注:

- Windows 2003 Standard または Enterprise エディション SP2: CA Business Service Insight は 32 ビットバージョンをサポートします。
- Windows 2008 Standard または Enterprise エディション SP2: CA Business Service Insight は 32 ビットおよび 64 ビットバージョンをサポートします。
- Microsoft Windows 2008 R2 Enterprise エディション SP1: CA Business Service Insight は 64 ビットバージョンをサポートします。

注:

- Windows 2008 Server R2 については、「[Windows 2008 Server R2 に関する重要な情報](#) (P. 119)」セクションを参照してください。

注:

- CA Business Service Insight をインストールする前に、Oracle サーバ、Oracle クライアント、およびデータベース接続設定コンポーネント(TNSnames.ora、listener.ora など)が正しくインストールおよび設定されていることを確認します。次に、OLEDB を使用してデータベースへの接続を確立し、作成されるインスタンスを認識するようにリスナが設定されていることを確認します。
 - TNSnames.ora はすべてのサーバ上に存在する必要があります
 - Listener.ora は DB サーバ上に存在する必要があります。

Windows 2008 Server R2 に関する追加情報

このセクションでは、CA Business Service Insight Web サービスに関する追加情報について説明します。

注:

- このソフトウェアは IP バージョン 6.0 トレラントです。
- Active Server Pages 拡張は Web サーバ上で[許可する]に設定される必要があります。
- 3 台以上のサーバにインストールする場合、アプリケーションおよび Web サーバの時刻を同期する必要があります。
- この製品は、サービスとエンティティ専用アカウントを使用する必要があります。
 - CA Technologies では、インストール時にローカル アカウントの代わりに CA Business Service Insight エンティティ用のドメイン アカウントを使用することを推奨します。同じアカウントがすべての CA Business Service Insight サーバに使用される必要があります。
 - 使用されているいずれのアカウントも、ローカル管理者グループのメンバーです。メンバーのユーザ名とパスワードを記録しておいてください。
- 以下の Oracle クライアント パッチ セットを使用します。
 - Oracle データベース ソフトウェア バージョン 10.2.0.4 用のパッチ セット 34。(P9393548)
 - Oracle データベース ソフトウェア バージョン 11.1.0.7 クライアント用のパッチ セット 24。(P9384493)
- Oracle OLEDB Provider がアプリケーション サーバおよび Web サーバにインストールされている必要があります。

注: MSMQ は以下のポートを使用します。

- TCP: 1801
- RPC: 135、2101/2112、2103/2114、2105/2116
- UDP: 3527、1801
- JDK 1.6.16 環境(32 ビット)
- JBoss バージョン 7.0 GA リリース
 - JBoss Messaging 1.4.5
 - JBoss Remoting 2.2.3 SP1

- JBoss Messaging 1.4.5.GA を使用するために移植された、JAVA 6 用の JBoss バージョン 7.0 GA リリースを設定します。

注:

- 既存の Oracle クライアントに Oracle OLEDB Provider を追加する場合、既存の Oracle ホームにインストールします。Oracle OLEDB Provider にインストールについてのサポートは、CA サポートチームにお問い合わせください。
- CA Business Service Insight サーバ NLS_LANG 設定は、データベース NLS_LANG 設定と同一である必要があります。

注: コンテンツ転送では JBoss アプリケーション サーバ上の以下のポートが使用されます: 3973、1198、1199、8183、4544、4545、1200、1201、4548、3628、19101、1261、1262、8193、8180、5546、4557。

JBoss をインストールする方法

JBoss 7 は、現在のリリースの一部として自動的にインストールされます。

ハードウェア前提条件

このセクションでは、各タイプの CA Business Service Insight サーバについて最小および推奨ハードウェア要件を説明します。さらに、このセクションでは、必要なネットワーク接続性について説明します。

ここで提供されるデータは一般的なガイドラインです。これらのデータは、実行中のプロジェクト固有の評価値やサイジング情報を置き換えるものではありません。

データベース サーバのハードウェア要件

以下の表に、CA Business Service Insight データベース サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。データベース キャパシティは、以下のようなさまざまなパラメータに依存します。

- メトリック数
- Raw データの量
- 履歴データが保持される期間

コンポーネント	最小	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM
ストレージ	40GB	120GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

Oracle をサポートするハードウェア プラットフォームの詳細については、以下を参照してください:

<http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html>

アプリケーション サーバのハードウェア要件

以下の表に、CA Business Service Insight アプリケーション サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。

コンポーネント	最小	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM
ストレージ	18GB	40GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

Web サーバのハードウェア要件

以下の表に、CA Business Service Insight Web サーバをホストするための最小および推奨ハードウェア要件を示します。

注: CA Business Service Insight サーバの操作に必要なサーバ数、CPU およびメモリのリソースは、ユーザ数やユーザ タイプに応じて増加します。

コンポーネント	最小	推奨
プロセッサ	デュアル 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ	クアッド 2.4GHz インテル コアまたは同等のプロセッサ
メモリ	4GB RAM	8GB RAM
ストレージ	18GB	40GB*
ネットワーク	100Mbps Fast Ethernet 接続	1Gbps Fast Ethernet

* RAID 5 コントローラ、または同等の高可用性/高スループット ディスク構成を強く推奨します。

クライアント ソフトウェアの前提条件

この表に、クライアントの前提条件を示します。

OS プラットフォーム	OS バージョン	パッチ レベル/バージョン
Microsoft	Microsoft Windows XP SP3 (32 ビット バージョンのみ)	SP3
	Microsoft Windows Vista (32 ビット バージョンおよび 64 ビット バージョン)	
	Microsoft Windows 7 (32 ビット バージョンおよび 64 ビット バージョン)	
	Microsoft .NET Framework 4 ランタイム。 この .NET Framework は、Microsoft Word 2010 アドインを使用してブックレットを作成するのに必要です。アドインはリボン内のタブとして表示され、.docx 形式のテンプレートを作成し、事前定義済みタグを使用してテンプレートを設計できます。	
	さらに、CA Business Service Insight Web システムのメトリックメモの拡張機能があります。メトリックメモを MS Word で編集し、文書として保存できます。その文書をメトリックメモとしてシステムにアップロードできます。このオプションは管理者によって設定できます。 .Net 4 の詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。	
	Microsoft Office Web コンポーネント 2003	バージョン 10 またはそれ以降。
	Microsoft Office Web コンポーネントの詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。	
	Microsoft Silverlight	バージョン 4.0 またはそれ以降。
	Microsoft Silverlight は、インタラクティブなユーザ体験を作成するための無償の .Net Framework プラグインです。 Silverlight とそのインストールの詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。	
	Adobe Flash Player。詳細については、Adobe の Web サイトを参照してください。	バージョン 8 またはそれ以降。

Java	JRE (Java Runtime Environment) 1.4.2.3 Java Runtime Environment の詳細については、 http://java.com/en/download/help/sysreq.xml http://java.com/en/download/help/sysreq.xml を参照してく ださい。	バージョン 1.4.2.3 ま たはそれ以降
------	---	---------------------------

- クライアントは、Internet Explorer Web ブラウザの以下のバージョンをサポートします。
 - 7.0
 - 8.0
 - 9.0
- クライアントには以下のセキュリティ設定が必要です。
 - クライアント スクリプト実行 (許可済み)
 - IIS セッション状態可用性 (有効)
 - セッション Cookie (有効)
 - 永続ブラウザ Cookie (有効)
 - ポップアップ ブロック (無効) CA Business Service Insight が信頼済みサイトとして定義されている、またはポップアップ ブロックがインストールまたは有効化されている。
 - ActiveX の実行 (許可済み)。会社の方針によりこの項目の設定が許可されていない場合は、クライアントを実行します。
 - Java アプレットの有効化 (有効)

第 3 章：標準新規インストール

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバのインストールに必要な前提条件と手順について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[開始前の確認事項 \(P. 27\)](#)

[インストール ダイアログ ボックス \(P. 33\)](#)

[サーバ インストール - 標準 \(P. 36\)](#)

[クライアント インストール - 標準 \(P. 45\)](#)

[インストール後の作業\(新規インストール時\) \(P. 47\)](#)

開始前の確認事項

- データベースを手動で作成する場合、インストールを開始する前に「新しいデータベースの手動作成」セクションをお読みください。そのトピックの OBLICORE_ROOT パラメータの説明を参照します。
- CA のデフォルト設定を使用しない場合は、[CA Technologies のデータベースオブジェクト用の命名規則ポリシー \(P. 147\)](#)を印刷します。ユーザのデータベース命名規則が CA Technologies のポリシーと異なる場合、インストールの前にフォームに記入して CA サポートにお問い合わせください。

紙を無駄に使用しないよう注意してください。

- インストールに関連する章を印刷します([クライアント インストール - 標準 \(P. 45\)](#)、[旧バージョンからのアップグレード \(P. 55\)](#)、[カスタム インストール \(P. 71\)](#)、[高可用性 \(P. 77\)](#)、[サイレント インストール \(P. 99\)](#))。

紙を無駄に使用しないよう注意してください。

- 設定プログラムを実行する前に Windows プログラムをすべて終了します。
- インストール ディレクトリ名に「&」および「.」（ドット）が含まれないことを確認します。

サードパーティ CD

CA Business Service Insight をインストールする前に、「CA Business Service Insight」という名前のフォルダ、および「CA Business Service Insight - Third Party」という名前のフォルダをダウンロードします。インストール中に、メッセージが表示されます。適切なフォルダの場所を入力して、製品を正しくインストールするために必要なファイルをダウンロードします。

フォルダ「CA Business Service Insight - Third Party」には、CA Business Service Insight で使用されるサードパーティ製品のファイルが含まれています。

以下の手順に従います。

1. サポート(support.ca.com)にログインします。
2. Download Center リンク(左側)に移動します。
3. 次の製品を入力します: CA Business Service Insight - WINDOWS-ALL。
4. バージョンを選択します。
ダウンロード可能なファイルがすべて表示されます。
5. 必要なフォルダをダウンロードし、後で使用するために保存場所を記録します。

サービスの停止

CA Business Service Insight をインストールする前に、タスク マネージャのプロセスリストで実行中の JAVA プロセスを確認し、インストールの開始前にそれらをすべて停止します。

アップグレード時には、CA Business Service Insight に属するサービス(すべての「Oblicore」サービス)をすべて停止します。さらに、すべての JAVA プロセス(ACE2、Oblisync、および Tomcat)も停止します。

インストールおよび地域の設定

地域と言語の設定が英語以外のときに、インストール コマンドが変更されてインストールが中断する場合があります。

地域と言語の設定が英語以外のときは、一時的に設定を[英語(米国)]に変更し、以下のインストール手順に従ってください。

1. **CA Business Service Insight** をインストールする前に、地域の設定を[英語(米国)]に変更します。
2. このガイドに記載されている手順に従ってインストールします。
3. 再起動します。
4. 地域の設定を元に戻します。
5. 再起動します。
6. **CA Business Service Insight** を使用します。

複数のサーバへのインストール

複数のサーバにインストールする場合：

1. Web サーバに移動して、分散トランザクション コーディネータ サービスを [開始] に設定します。
2. Web サーバに移動して、World Wide Web 発行サービスを [開始] に設定します。
3. Oracle クライアントおよびデータベース接続設定 (たとえば [TNSnames.ora](#)、[listener.ora](#)) コンポーネントを正しくインストールおよび設定します。そうすれば、OLEDB を通じてデータベースへの接続を確立できます。
 - a. [TNSnames.ora](#) (P. 31) をすべてのサーバにインストールおよび設定します
 - b. [Listener.ora](#) (P. 31) をデータベース サーバにインストールおよび設定します

アプリケーションおよび Web サーバ

1. ローカル ネーミング構成ファイル
(`$ORACLE_HOME¥network¥admin¥TNSNAMES.ORA`) に、サービス エイリアス、および正しいホスト名とポート (デフォルトは 1521) が含まれていることを確認します。

注：以下の TNSNAMES.ORA ファイルの例を参照してください。

DB サーバ

1. リスナ構成ファイル (`$ORACLE_HOME¥network¥admin¥LISTENER.ORA`) が正しく設定されており、作成されるインスタンスを認識することを確認します (以下の LISTENER.ORA ファイルの例を参照)。
2. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。

```
lsnrctl status
```

サービス サマリのリストが表示されます。以下のメッセージが表示されます。
 - "The command completed successfully"
3. メッセージが表示されない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
lsnrctl start
```

以下のメッセージが表示されます。
 - "The command completed successfully"

4. ファイル(\$ORACLE_HOME¥network¥admin¥SQLNET.ORA)に以下の行が含まれていることを確認します。
SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES = (NTS)
5. Oracle クライアントとリスナ間の通信をテストします。
 - a. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。
Tnsping <tns_entry_name>

システムは "OK" を返し、応答時間が表示されます。

TSNAMES.ORA ファイル

```
OBLICORE =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = server12.ca.com)(PORT = 1521))
    (CONNECT_DATA =
      (SERVER = DEDICATED)
      (SERVICE_NAME = oblicore)
    )
  )
```

LISTENER.ORA ファイル

```
SID_LIST_LISTENER =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (GLOBAL_DBNAME = OBLICORE)
      (ORACLE_HOME = C:¥app¥Administrator¥product¥11.2.0¥dbhome_1)
      (SID_NAME = oblicore)
    )
  )

LISTENER =
  (DESCRIPTION_LIST =
    (DESCRIPTION =
      (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = server12.ca.com)(PORT = 1521))
      (ADDRESS = (PROTOCOL = IPC)(KEY = EXTPROC1521))
    )
  )
```

新しいデータベースの手動作成

この手順は任意であり、(手動で作成したデータベースを使用する場合は) CA Business Service Insight の他の要素 (サーバまたはクライアント) をインストールする前に実行される必要があります。

注: この手順 (データベースの手動作成) では Cloud_Insight_Server_8.2.exe を使用しません。代わりに Main.bat ファイル (Windows) または Main.sh ファイル (UNIX) を使用します。

注: bat および sh ファイルは、Server¥program files¥CA¥Cloud Insight¥Setup¥InstallDB の下にある CA Business Service Insight メイン インストール CD にあります。

注: この手順では、アプリケーション サーバおよび Web サーバはインストールされません。

以下の手順に従います。

1. start_parameter.ini ファイル内のパラメータを編集し、「パラメータの説明」に従ってパラメータ値を入力します。

注: start_parameter.ini ファイルには、この表に一覧表示されたパラメータのみが存在する必要があります。その他のパラメータは削除します。

パラメータ	パラメータの説明
OBLICORE_ROOT	目的のデータベース配置場所。設定では、このフォルダの下にフォルダがデータベース名で作成されます (例: c:¥Oblcore)。 注: インストールを開始する前にこのフォルダを作成します。インストール セットアップでは、このフォルダは作成されません。
DB_NAME	データベース名。名前の長さは 8 文字以下にする必要があります。
ORACLE_HOME	(レジストリに従って) Oracle Home が配置されるフォルダ。
ORACLE_VERSION	Oracle のメインバージョン。サポートされているバージョンは 10.x および 11.x です。
SYS_PASS	SYS ユーザのパスワード。
OBLICORE_USER	CA Business Service Insight のデータベース オブジェクトが配置されているスキーマの名前。
OBLICORE_PASS	スキーマ パスワード。

OBLIDBADMIN_PASS	管理データベース ユーザのパスワード。
DB_CHARSET	UTF-8 または MSWIN (1252) を選択します。UTF-8 を推奨します。
DB_SYNONYM	Public または Private シノニムを選択します。

- オペレーティング システムに適切な Main ファイルを実行します。
 - Windows ベースのシステム: Main.bat ファイル (場所: Setup¥InstallDB フォルダ)。
 - UNIX ベースのシステム: Main.sh ファイル (場所: Setup¥InstallDB フォルダ)。
- コマンドライン ウィンドウに表示されたパラメータを確認します。
- 「Y」と入力して、データベース作成処理を開始します。
- プロンプトで任意のキーをクリックし、プロセスを完了します。
- ログ ファイルでエラーを確認します。
ファイルの場所はポップアップ画面に表示されます。

インストール ダイアログ ボックス

このセクションでは、標準/カスタム インストールのダイアログ ボックスとその使用方法について説明します。

標準インストール ウィンドウ

以下の表に、標準インストールのダイアログ ボックスおよび関連情報 (パラメータと値) のリストを示します。

注: ダブル ダガー (‡) が付いているエントリはダブル バイト文字を使用することはできません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件 (例: ASCII) および制限 (特殊文字、ダブルバイト文字など) については、Oracle の資料を参照してください。

注: 組織名にはダブル バイト文字を含めることができません。

名前	パラメータ	指定可能な値	特記事項
データベース作成 ‡ 次のインストール時に開きます: データベース	■ Oracle バージョン ■ データベースファイルの場所 ■ データベースサーバ名 ■ 文字セット ■ シノニム	■ デフォルト値: サーバのデフォルト値 ■ データベースファイルの配置場所 ‡ ■ データベース サーバの名前 ‡ ■ UTF8 または MSWIN ■ Public または Private	[ユーザの選択]ウィンドウの使用中に、Microsoft 標準の[ネットワークパスワードの入力]ウィンドウが何度か表示されます。 ドメインにログオンしていない場合に、このウィンドウが表示されます。必要に応じて、有効なドメイン ユーザおよびパスワードを入力してドメインにアクセスします。
データベース接続 ‡ 次のインストール時に開きます: データベース アプリケーション Web サイト	■ Oracle バージョン ■ CA Business Service Insight データベースインスタンス TNS 名 ‡		CA Business Service Insight の TNS 名を TNSNAMES.ORA ファイルに入力します。‡

名前	パラメータ	指定可能な値	特記事項
ログオン情報 ‡ 次のインストール時に開きます : アプリケーション Web サイト	■ ユーザ名 ■ パスワード ■ [新規ユーザの情報]ボタン	■ インストールを実行したユーザの名前 ‡ ■ ユーザ パスワード ‡ ■ [新規ユーザの情報]の行を参照	デフォルトで割り当てられるユーザ名は、インストールを実行したユーザ アカウントです。 ユーザ名とパスワードをドメイン アカウントに変更することを推奨します。
ユーザの選択 次のインストール時に開きます : アプリケーション Web サイト	■ オブジェクト タイプ ■ 場所	[ユーザの選択]ボタンを選択した後のログオン情報画面内。	管理者ローカル グループに属しているユーザを選択する必要があります。
新規ユーザの情報 次のインストール時に開きます : アプリケーション Web サイト	■ ドメインまたはサーバ ■ グループ ■ ユーザ名 ■ パスワード ■ パスワードの確認		このダイアログ ボックスで、新しい CA Business Service Insight ユーザ名を作成できます。 注: このダイアログ ボックスには[ログオン]ダイアログ ボックスからのみアクセスできます。
ログ サーバ環境設定 次のインストール時に開きます : Web サイト	■ ログ サーバ ネットワーク アドレス ■ ログ サーバ ネットワーク ポート	デフォルトは、Web サーバを含む単一層および任意の層で有効な localhost です。 ■ デフォルト値は 4040 です。	ログ サーバがローカル ホスト上にない場合は、アドレスを適切なサーバに変更します。 注: アドレスはログ サーバのインストール先のアドレスである必要があります。
ネットワーク パスワードの入力	■ ユーザ名 ■ パスワード		この画面は、ドメインにログインしていない場合にのみ表示されます。この画面は何度も表示されることがあります。

サーバインストール - 標準

このセクションでは、CA Business Service Insight サーバを新規にインストールするのに必要な手順について説明します。

注：サーバおよびクライアントはサイレント モードでインストールできます。

サーバ数(トポロジ)

CA Business Service Insight 8.2 は、トポロジ テーブルに記載されているとおり、1、2、3、および 4 サーバ以上のトポロジにインストールできます。

注：

- アップグレード時にトポロジタイプ(サーバ数)を変更する場合は、アップグレードを実行する前に CA サポートまでお問い合わせください。
- 最初から複数のサーバにインストールする場合、以下の順序でインストールする必要があります。
 - データベース([開始前の確認事項](#) (P. 27)を参照)
 - アプリケーション
 - Web

インストール前に、この表で、使用するサーバ数(トポロジ)でのインストール順序を確認します。

トポロジタイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
1 台のサーバ	データベース、アプリケーション、 および Web コンポーネントは同じ サーバにインストールされます。	このサーバ上で Cloud_Insight_Server_8.2.exe を実行。
2 台のサーバ	2 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベ ースコンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケー ションと Web コンポーネント	新規インストール ■ データベースサーバ上のデータベ ースの作成。 ■ アプリケーションと Web サーバのイン ストール。

トポロジ タイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
3 台のサーバ	3 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベースコンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーションコンポーネント ■ 3 台目のサーバ: Web コンポーネント	新規インストール ■ データベースサーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーションサーバのインストール。 ■ Web サーバのインストール。
4 台以上のサーバ	4 台以上のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベースコンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーションコンポーネント ■ 3 台目のサーバ: Web コンポーネント ■ 4 台以上のサーバ: 追加のアプリケーションコンポーネント	新規インストール ■ データベースサーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーションサーバのインストール。 ■ Web サーバのインストール。 ■ 追加のアプリケーションコンポーネントのインストール。

64 ビット サーバの制限事項

単一層インストール(のみ)では、Oracle 64 ビット サーバはサポートされていません。CA Business Service Insight を 64 ビットの Oracle サーバ上に単一ポロジでインストールするには、以下の手順に従います。

以下の手順に従います。

1. 新しい Oracle ホームに Oracle 32 ビット クライアントをインストールします。
手順については、Oracle の Web サイトを参照してください。
2. データベース サーバに、(BSI メイン インストール CD にある)ディレクトリ
"¥Server¥program files¥CA¥Cloud Insight¥Setup¥InstallDB" をコピーします。
3. ファイル「start_parameters.ini」を編集モードで開きます。

このファイルの一番上には次のパラメータのリストが含まれています。

- [DataBaseDetails]
- OBLICORE_ROOT=c:¥oblicore
- DB_NAME=oblicore
- ORACLE_HOME=c:¥oracle¥product¥11.1.0¥db_1
- SYS_PASS=sys
- OBLICORE_USER=oblicore
- OBLICORE_PASS=oblicore
- OBLIDBADMIN_PASS=oblidbadmin
- DB_CHARSET=utf8
- DB_SYNONYM=public

これらの手順で、パラメータの値がリスト内の値と同じであることを確認します。

4. ORACLE_HOME パラメータが、クライアントではなくサーバのホームに設定されていることを確認します。
5. 必要な変更を加え、ファイルを保存して閉じます。
6. ファイル「Main.bat」をダブルクリックします。
ポップアップ ウィンドウに「Main.bat」のパラメータとその値が表示されます。
すべてのパラメータが正しいことを確認します。
7. 「Y」キーを押すとインストールが開始されます。

8. データベースのインストールが完了したら、CA Business Service Insight の[カスタムインストール](#) (P. 71)を実行します。アプリケーション コンポーネントと Web コンポーネントのみを選択します。データベース コンポーネントは選択しません。
9. 複数の Oracle が存在するというメッセージが表示されたら、正しい Oracle SERVER ホームを選択します。
10. インストールを続行します。
11. Oracle クライアントのパスを確認します。
 - a. [マイコンピュータ]に移動し、右クリックして[プロパティ]-[システムの詳細設定]-[環境変数]を開きます。[システム環境変数]パネルで「Path」を見つけて、[編集]をクリックします。
 - b. Oracle クライアントパスがデータベースパスの前にあることを確認し、[保存]をクリックします。

重要: データベース コンポーネントは選択しないでください。

CA Business Service Insight サーバのインストール

このセクションでは、CA Business Service Insight を新規にインストールするのに必要な手順について説明します。

注: データベースを自動的に作成しない場合は、[「データベースの手動作成」\(オプション\)](#) (P. 32)を参照してください。

注: 標準インストール手順を使用するのは、4 台以上のサーバにシステムを分散させる必要がない場合、または CA サポートがこのオプションを推奨している場合です。

注: 各サーバについてのこれらの指示を使用します。

以下の手順に従います。

1. Server ディレクトリ内の Cloud_Insight_Server_8.2.exe をダブルクリックします。

[言語の選択]ダイアログ ボックスが表示されます。

2. インストール言語を選択して、[OK]をクリックします。

インストールの続行にアプリケーションが必要な場合は、それらがダイアログ ボックスにリスト表示されます。

3. [インストール]ボタンをクリックして、必要なプログラムを自動的にインストールします。

インストール ウィザードが表示されます。

4. [次へ] をクリックして続行します。

[エンド ユーザ使用許諾契約]ウィンドウが表示されます。

[ようこそ]ウィンドウが表示されます。

5. [次へ]をクリックします。

[エンド ユーザ使用許諾契約]ウィンドウが表示されます。

6. 使用許諾契約に目を通します。同意する場合は、[使用許諾契約の条項に同意します]を選択して[次へ]をクリックします。

[組織情報]ウィンドウが表示されます。

7. 組織名を入力します。組織名に特殊文字(& など)が含まれる場合、各特殊文字の前に ^ を追加します。たとえば、AB&C は AB^&C となります。

注: ここでダブル バイト文字は使用しないでください。

8. [次へ]をクリックします。
[セットアップ タイプ]ウィンドウが表示されます。
9. [標準]を選択し、[次へ]をクリックします。
[デスティネーション フォルダ]ウィンドウが表示されます。
10. [参照]をクリックし、デスティネーション フォルダを選択/作成するダイアログボックスを開きます。
 - a. デスティネーション フォルダを選択または作成し、[次へ]をクリックします。
[機能の選択]ウィンドウが表示されます。
または
 - b. [次へ]をクリックしてデフォルトの送信先フォルダを使用します。
[機能の選択]ウィンドウが表示されます。
11. 必要とするインストール機能を(Database、Application、Web から)選択し、[次へ]をクリックします。

注: これ以降は、選択した機能に関連するダイアログ ボックスのみが表示されます。関連付けられた機能が選択されていない場合、ダイアログ ボックスは表示されません。たとえば、ユーザが[データベース]機能を選択していなければ、[データベース作成]ダイアログ ボックスは表示されません。

選択されたサーバ	関連するダイアログ ボックス
データベース + アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[データベース作成]
アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[データベース接続]
データベース	データベース作成
アプリケーション	[ログオン情報]、[データベース接続]
Web	[ログオン情報]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]

12. [ログオン情報]ダイアログ ボックスに、CA Business Service Insight によって使用されるユーザ アカウントを入力します。

- a. [新規ユーザ]ボタンをクリックして新規ユーザを作成するためのダイアログ ボックスを開き、[次へ]をクリックして必要に応じて情報を入力します。

注: 後で参照できるように、入力した情報は記録しておいてください。

13. [データベース作成]ダイアログ ボックスで、すべてのフィールドに必要な情報を入力し、[次へ]をクリックします。

[ファイルのコピーの開始]ダイアログ ボックスが表示されます。

14. サードパーティ CD の場所/パスを入力または参照し、[次へ]をクリックします。

注: JBoss がすでにインストールされており、ユーザが新しいバージョンをインストールする場合は、このインストールによって環境変数 "JBoss_HOME" が上書きされます。インストール後、環境変数は新しい JBoss を指すようになります。

注: 旧バージョンの JBoss のコンポーネントが検出された場合は、チェックボックスの選択画面が表示され、クリーンアップするコンポーネントを選択するように指示するメッセージが表示されます。

- a. クリーンアップするには、目的のチェック ボックスを選択して[次へ]をクリックします。
- b. クリーンアップなしで続行するには、[次へ]をクリックします。

JBoss がインストールされ、完了時に現在の設定が表示されます。

15. ここまでの設定(現在の設定)の内容を確認します。ここまでの設定で変更する点がある場合は、[戻る]をクリックします。

- a. インストールをキャンセルするには、[キャンセル]をクリックします。
- b. 表示されていない場合は、[次へ]をクリックします。[セットアップ ステータス]ウィンドウが表示され、インストールが開始されます。

注: インストールには数分かかります。しばらくお待ちください。

16. データベースについては、コマンドラインウィンドウの手順に従います。

注: データベースのインストールには数分かかります。しばらくお待ちください。

インストールが終了すると、インストールに成功したことを知らせる確認ウィンドウが表示されます。

17. プロンプトが表示されたら、[完了] (デフォルトは[はい]) をクリックしてコンピュータを再起動します。

システムが再起動します。

注: [カスタム] を選択している場合は、[デスティネーションフォルダ] ウィンドウが表示されます。カスタム インストール手順を続けるか、[戻る] をクリックして前のダイアログ ボックスに戻ります。

アプリケーション サーバの追加インストール

アプリケーション サーバの追加インストールの方法を以下に示します。これらの手順は、4 台以上のサーバにインストールする場合に限り使用します。

サービスの分配

いくつかのアプリケーション サーバにサービスを分割するときに、これらの手順を実行します。

以下の手順に従います。

1. アプリケーション サーバの [カスタム] インストールを開始します。
2. 最初のアプリケーション サーバをインストールします。
3. [カスタム] インストール手順を使用して、追加のアプリケーション サーバをインストールします。この手順では、必要とされる追加のサービス/機能のみをインストールします。
4. オペレーティング システムの [サービス] ダイアログ ボックスを開いて、追加のアプリケーション サーバにインストールされた不要なコンポーネントをクリアするか停止します。

コンポーネント	説明
アダプタ	アダプタ サービス オプション (テキスト ファイル、SQL、マネージャ、正規表現 チェッカ) をインストールします。
アダプタ リスナ	アダプタ リスナ をインストールします。 注: アダプタ リスナ サービスは 1 回しかインストールできません。
アラート	アラート サービス をインストールします。 注: アラート は 2 回以上インストールしないでください。
ダッシュボード エンジン	ダッシュボード エンジン サービス をインストールします。 注: ダッシュボード エンジン サービスは 1 回しかインストールできません。

コンポーネント	説明
ログ サーバ	ログ サーバ サービスをインストールします。
ペナルティライタ	ペナルティ サービスをインストールします。
PSL ライタ	計算エンジン サービスの 1 つのインスタンスをインストールします。
レポートスケジューラ	レポートスケジューラ サービスをインストールします。
ACE Engine on JBoss アプリケーション サーバ	ACE2 Manager を実行する JEE アプリケーション サーバ。
Tomcat 6	Apache Tomcat 6.0.32 サーバ (http://tomcat.apache.org)。
Oblisync on JBoss アプリケーション サーバ	[コンテンツ転送]機能の実行を有効にします。
ScriptHost	スクリプト ホスト サービスをインストールします。 注: スクリプト ホスト サービスは 1 回しかインストールできません。
タスク ホスト	タスク ホスト サービスをインストールします。 注: タスク ホスト サービスは 1 回しかインストールできません。

複数のサーバへのアダプタの配置

アダプタと共にインストールされる各サーバについて、以下の指示に従います。

以下の手順に従います。

1. カスタム Web サーバ インストールを開始します。
2. [機能の選択]ウィンドウに移動し、[Web サイト]、[サービス]、[管理ツール]、および[データベース]機能をクリアします。

注: 追加のアプリケーション サーバのうち 1 台に、アダプタリスナが含まれることを確認します。

クライアント インストール - 標準

このセクションでは、クライアントをインストールする手順について説明します。

クライアントはサイレント モードでインストールできます。詳細については、「[サイレント インストール](#) (P. 99)」を参照してください。

注: CA Business Service Insight ページは、エンド ユーザのブラウザ上で追加のサードパーティアプリケーションをインストールする必要があります。これらのアプリケーションは、特定のページ、またはクライアント インストール キットから取得できます。

コンポーネント

この表には、クライアントの HTML ページで使用するためにインストールされる必須コンポーネントのリストを示します。

コンポーネント名	サードパーティ アプリケーション	使用される機能
タイムスロット エディタ	アプレット	デザイン、ファンデーション エンティティ、タイムスロット テンプレート、タイムスロットの表示
TeeChart Pro	ActiveX	レポート、レポートウィザード、生成
フローチャート	ActiveX	サービスレベル管理、契約ナビゲータ
スクリプト エディタ	ActiveX	カタログ、テンプレート ライブラリ、ビジネス ロジック テンプレート、ビジネス ロジック テンプレートの追加
DataSourceAnalyzerAX	ActiveX	デザイン、データ取得、アダプタ、新規追加、テキスト ファイル/SQL アダプタ
ActiveQueryBuilderXControls	ActiveX	デザイン、データ取得、アダプタ、新規追加、新規 SQL アダプタの追加

CA Business Service Insight クライアントのインストール

CA Business Service Insight クライアントは、Web サイトにログオンする前に任意のエンド ユーザ コンピュータで実行される必要があります。

注: 管理者権限を持つユーザがインストールを実行することを確認してください。

以下の手順に従います。

1. 設定プログラムを実行する前に Windows プログラムをすべて終了します。
2. Cloud_Insight_Client_8.2.exe をダブルクリックします。
3. 画面上の手順に従ってください。

インストール後の作業(新規インストール時)

このセクションでは、インストール後の作業を実行する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 以下の操作を行って、選択したサービスが正しくインストールされていることを確認します。
 - a. [開始]-[実行]をクリックして「services.msc」と入力します。
 - b. [OK]をクリックします。
[サービス]ウィンドウが表示されます。
 - c. インストール中に選択したコンポーネントに対応するサービスが正しくインストールされたことを確認します。

注: すべての CA Business Service Insight サービスには、名前のプレフィックスとして「Oblicore」という単語が付き、[サービス]コントロール パネルにリスト表示されます。

注: 各サービスのサーバの場所は、「サービス名」の後に示されます。

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カタロ グのモデル化	サービス レベ ルの計算	エンタープライズ の影響度分析
ACE 移行サービス	ACE 移行サービスはバージョン 8.2 でインストールされるサービスです。このサービスは、メトリックを ACE1 エンジンから ACE2 エンジンに割り当てるプロセスの間に到着する再計算日付リクエストを検出および設定します。			

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カタロ グのモデル化	サービス レベ ルの計算	エンタープライズ の影響度分析
アダプタリスナ (アダプタ) / アプリケーション サーバ	アダプタと通信します。 このサービスは、アダプ タからデータを読み取 り、CA Business Service Insight データベース内 に格納します。この サービスとアダプタとの 通信は、TCP/IP ソケット を介して実行されます。	いいえ	はい	いいえ
アダプタ展開 (アダプタ) / アプリケーション サーバ	アダプタを作成します。 このサービスは、アダプ タウィザードからアダプ タの作成、更新、または 削除リクエストを受信し ます。このサービスとの 通信は、Web サービス インターフェースを介し て実行されます。	いいえ	はい	はい
アラート (イベント) / アプリケーション サーバ	システムの各部からイベ ントを受信します。この サービスは、イベントの データをシステムのア ラートプロファイルの セットと比較します。イ ベントがアラートプロ ファイルに一致する場 合、サービスはアラート を生成します。サービ スはデータベース キューからイベントを受 信します。	いいえ	はい	はい
現在のステータス エ ンジン (ダッシュボード) / アプリケーション サーバ	ダッシュボード上の[現 在のステータス]インジ ケータを計算します。	いいえ	いいえ	はい

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カタロ グのモデル化	サービス レベ ルの計算	エンタープライズ の影響度分析
ダッシュボード エン ジン (ダッシュボード)	各ダッシュボード エン ティティの重大度を計算 します。	いいえ	いいえ	はい
/ アプリケーション サーバ				
ログ サーバ (ログ)	システムの各部からのロ グ メッセージをデータ ベースに書き込みま す。	はい	はい	はい
/ アプリケーション サーバ	各 CA Business Service Insight コンポーネントは TCP/IP ソケットを介して ログ サーバと通信し、 メッセージをログに記録 します。			
ペナルティライタ	後方互換性を提供しま す。廃止されたペナル ティライタ機能はメトリ ックを使用して行われるよ うになりました。	いいえ	いいえ	はい
/ アプリケーション サーバ				
PSL Writer (PSL)	古いメインの計算エンジ ン。システム内の各契 約に含まれる各メトリッ クのサービスレベルを計 算します。	いいえ	はい	はい
/ アプリケーション サーバ	スケール アップするに は、アプリケーション サーバ上に複数の PSL Writer サービスをインス トールします。その場 合、通常は「PSL Writer N」というサービス名にな ります。N は各サービス に指定された一意の ID です。			

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カタロ グのモデル化	サービスレベ ルの計算	エンタープライズ の影響度分析
レポート スケジュー ラ (レポート)	スケジュールされたレ ポートを実行します。	いいえ	いいえ	はい
/ アプリケーション サーバ				
PSLWorker <番号> (ACE2) / アプリケーション サーバ	ACE2 メトリックに提供さ れるサービスレベルを 計算します。	いいえ	はい	はい
ScriptHost / アプリケーション サーバ	エンジン タスクをホスト します	はい	はい	はい
Oblisync on JBoss ア プリケーション サー バ (コンテンツ転送)	[コンテンツ転送]機能 の実行を有効にしま す。	いいえ	はい	いいえ
/ Web サーバ				
ACE on JBoss アプリ ケーション サーバ / アプリケーション サーバ	JEE アプリケーション サーバです。ACE2 Manager を実行しま す。	いいえ	はい	はい
Tomcat 6 / アプリケーション サーバ & / Web サーバ	このサービスは、 Apache Tomcat 6.0.32 サーバです (http://tomcat.apache.org)。	はい	はい	いいえ

サービス名 / サーバ	サービスの説明	サービス カタロ グのモデル化	サービス レベ ルの計算	エンタープライズ の影響度分析
タスク ホスト / アプリケーション サーバ	以下のような非同期のシステム メンテナンス操作を実行します。 ■ 有効期限が切れた時点で契約のステータスを変更する ■ 不明なイベントの Raw データを分析する ■ 契約が最新かどうかを確認するインジケータを計算する。契約を表示するときにそのデータを確認できます。 ■ 「変換スクリプト」を実行する	はい	はい	はい

1. タイムゾーン用に選択した時間オフセット(GMT からの時間)が、タイムゾーン名の時間オフセットの定義と一致することを確認します。夏時間の期間の開始日と終了日を定義する場合は、選択したタイムゾーンの国で定義されている日付を設定します。開始日または終了日のフィールドに無効な情報が含まれる場合、システムが正しく機能せずにメトリック計算が遅延することがあります。
2. リバース プロキシが CA Web サイトに転送するリクエストをサポートするには、プレフィックス文字列を ProxyPrefix キー値として入力します(web.config ファイルの AppSettings セクション)。このプレフィックス文字列は、プロキシ設定で CA Web サイトにリクエストをルーティングするように設定されています。
 - a. プロキシの値が正しいスペルで入力され、その前後にスラッシュがあることを確認して(例: "/prefix/"), Web サイトがリバース プロキシに正しくルーティングされるようにします。

たとえば、CA Web サイトにマッピングされたプレフィックスが「ca」の場合、web.config ファイルを以下のように更新します。

```
<appSettings>
  <add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

ProxyPrefix キーが存在しない場合やその値が空の文字列の場合、Web サイトは標準モードで動作します。

- b. プロキシ設定にヘッダを追加します。ヘッダ キーは以下のように指定する必要があります:
"X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy"。

たとえば、Oblicore Web アプリケーションのプロキシ アクセス URL が http://proxy/ca/ の場合(「ca」はプレフィックス)、web.config ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
  <add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

この更新のほかに、以下のキー名の新しいヘッダがプロキシ Web アプリケーション設定に追加されます:

"X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy"。

言語の選択

1. CA Business Service Insight インターフェースの言語を選択するには、[ユーザ名(組織)]メニュー項目(「ログアウト」メニュー項目の左)にマウスカーソルを移動します。
[設定]メニュー項目が表示されます。
2. [設定]をクリックします。
[ユーザ プリファレンス]ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [優先言語]オプションからインターフェース言語を選択します。
4. [保存]をクリックします。
メッセージが表示され、CA Business Service Insight は選択されたインターフェース言語で表示されます。選択された言語は、ユーザが変更するまでデフォルトの言語になります。

SMILoader

SMILoader は現在のインストールに含まれていません。インストールの完了後、ローダを手動で実行します。

以下の手順に従います。

1. 各 CA Business Service Insight サーバ上でコマンドプロンプトを開き、
C:\inetpub\wwwroot\Oblicore\bin に移動します。
2. SmiContentLoader.exe を実行し、画面の指示に従います。
SMI コンテンツが自動的にロードされます。

第 4 章：旧バージョンからのアップグレード

このセクションでは、旧バージョンの CA Business Service Insight からのアップグレードに必要な手順について説明します。

以下のバージョンからアップグレードできます。

- 7.0 SP1
- 8.0
- 8.0.110
- 8.1
- 8.1.1

アップグレード ファイルは、プログラムを実行しているサーバを認識して必要なファイルを更新します。

重要：

- アップグレードは、まずアラート サービスがインストールされたアプリケーション サーバに対して実行し、その後で他のすべてのサーバに対して実行する必要があります。
- マイグレーション スクリプトは、アラート サービスがインストールされたアプリケーション サーバ上で自動的に実行されます。
- インストールの前に、「[アップグレード時のダイアログ ボックスと設定](#) (P. 64)」セクションを印刷しておくことを推奨します。
- マルチサーバ環境をアップグレードする場合、アップグレード処理をまずアプリケーション サーバに対して実行し、その後で Web サーバに対して実行します。アプリケーション サーバがアップグレードされた時点で自動的にデータベース マイグレーションが実行されます。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[開始前の確認事項](#) (P. 56)

[インストールおよび地域の設定](#) (P. 60)

[CA Business Service Insight へのアップグレード](#) (P. 61)

[インストール後の作業\(アップグレード時\)](#) (P. 68)

[アップグレード ログ ファイル](#) (P. 70)

開始前の確認事項

重要: アップグレードがスムーズに実行できるように、アップグレードを開始する前に以下を確認します。

1. ロールバックに対応できるように、すべての **CA Technologies** フォルダおよびファイルのバックアップが取っており、データベース ダンプが作成されていることを確認します。

注: インストール処理は、データベースの変更を伴います。アップグレード前にデータベースをバックアップし、インストール後にサーバを再起動します。

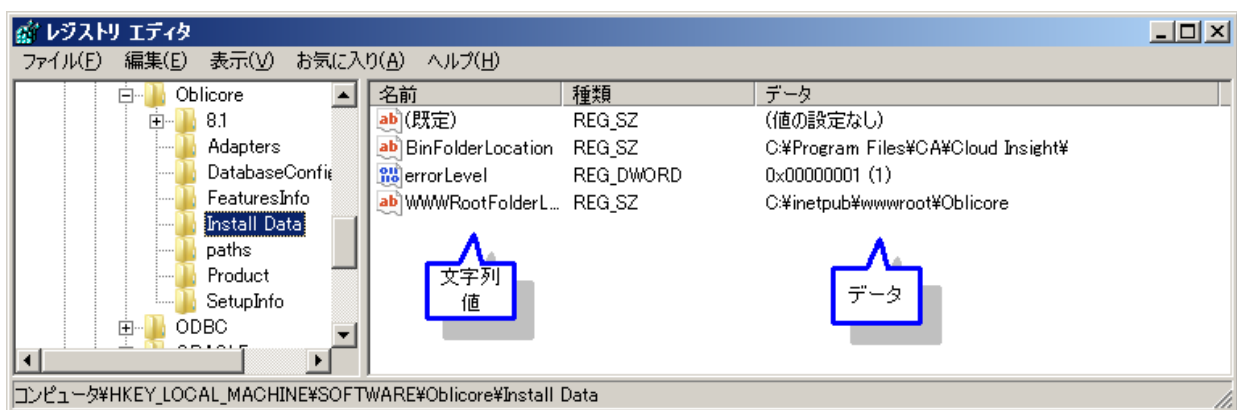
注: ロールバックを実行するには、旧バージョンをすべてアンインストールしてから再インストールし、バックアップ データをインポートします。

2. カスタマイズしたファイルがすべてバックアップ済みであることを確認します。以下のファイルはカスタマイズ可能です。
 - LoginCommon.asp
 - RedirectToLogin.asp
 - SilentLogin.asp
 - AcceptLogin.asp
 - Web.config
 - Registry.xml
 - Index.asp (シングル サインオン用)
 - logo.jpg
 - logo.gif
 - logobg.gif
 - logout1.gif
 - logout2.gif
 - Reportlogo (およびダッシュ/レポート エクスポートなどの他のロゴ)
3. 言語パッケージに変更を加えた場合は、そのデータのバックアップを取ります。
4. データベース内の各テーブル スペースに少なくとも **15 パーセント**の空き領域があることを確認します。autoextend がオンになっている場合、データファイルの maxsize が、データファイルの現在のサイズの少なくとも **15 パーセント**以上に設定されることを確認します。

5. データベーステーブルスペースが含まれる各物理デバイスの空き領域が、デバイス内にあるすべてのテーブルスペースの合計サイズの少なくとも 15 パーセントであることを確認します。
6. すべての Oblicore サービスを停止します。
7. Web サイト (WWW サービスまたは IIS Admin サービスを除く) を停止します。
 - a. 分散トランザクション コーディネータ サービスが起動するように設定します。

注: この分散トランザクション コーディネータ サービスはアップグレード時のみに必要です。自分が所属している会社の方針に従ってこのサービスを無効にする必要がある場合は、システム管理者に問い合わせてサポートを受けてください。

8. CA Business Service Insight トポロジに、アプリケーション サーバとしてのみ指定されたサーバが含まれない場合:
 - a. Web または Web サービス サーバのレジストリを開き、以下のエントリを参照します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Oblicore¥Install Data
 - b. 64 ビット システムについては、エントリは次のとおりです:
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥WOW6432node¥Oblicore¥Install Data
 - c. WWWRootFolderLocation が存在することを確認します。
 - d. この文字列値のデータに Web フォルダのフォルダパスが含まれていることを確認します。例: "C:¥inetpub¥wwwroot¥Oblicore" (以下の図を参照)。



9. CA Business Service Insight トポロジに、アプリケーション サーバとしてのみ指定されたサーバが含まれる場合:
 - a. アプリケーション サーバのレジストリを開き、以下のエントリを参照します: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Oblicore¥Install Data
 - b. WWWRootFolderLocation 文字列値が存在しないことを確認します。存在する場合は、文字列値を削除します。
10. Oracle OLEDB Provider がアプリケーション サーバと Web サーバにインストールされていることを確認します。

注: 以下の手順を実行するには、SYSDBA 権限が必要です。
11. oblicore_privs.sql を実行します。これはマイグレーション ルート ディレクトリの下に配置されています (例: C:¥Program Files¥Oblicore¥Database Installation¥Migration)。Setup¥Migration フォルダのインストール CD からスクリプトを取得できます。
12. バージョン 7.0SP1 からアップグレードする場合は、以下のように sys パスワードを必要とするマイグレーションの部分を別々に実行できます。
 - OG8.0MigrationSys.bat ファイルを実行します。
 - OG8.xMigration.bat を実行します (SYSDBA 権限は必要なし)。
13. init.ora ファイルで job_queue_processes パラメータが 2 に設定されていることを確認します。他の値の場合は、2 に変更します。

データベース ジョブの再編成

特定のカスタマに関係のない機能がデータベース ジョブで参照される場合、カスタマによってそのデータベース ジョブが無効化されることがあります。

バージョン 8.2 より前の一部のバージョン(すべてではありません)では、指定データベース ログイン ユーザおよび指定権限ユーザは **oblidbadmin** でした。現在のバージョンでは、データベース ジョブが作成されときの指定データベース ログイン ユーザおよび指定権限ユーザは **Oblicore** になります。

バージョン 8.2 にアップグレードすると、スキーマ **Oblicore** または **oblidbadmin** で作成された現在のジョブ (10) はすべて自動的に削除され、ユーザ **Oblicore** で再サブミットされます。その結果、無効なジョブがアクティブになります。

そのため、意図的に無効にしていたすべてのジョブを再度無効にしてください。

ジョブを無効にするには、「**broken**」属性を設定し、ジョブを完全に削除しないことをお勧めします。将来のマイグレーション中に、非表示になったジョブを自動的に再作成できます。

例:

```
-- アップグレード前。
-- broken ジョブを検索します。
-- 結果を記録します。
select what
  from dba_jobs
 where schema_user = 'OBLICORE'
        and broken   = 'Y'

-- アップグレード後。ジョブを選択します。
select job
  from dba_jobs x
 where schema_user = 'OBLICORE'
        and what     = 'oblicore.db_mng_forecast_pkg.cre_forecast_new_partition
('PSL');'

-- 予想される結果です。
JOB
---
48

-- ジョブを再サブミットします。
begin
  dbms_job.broken (48 , true);
commit;
```

```
end;  
  
-- または  
-- ジョブを再サブミットします (SQLplus).  
  
exec dbms_job.broken (48 , true);  
commit;
```

サービスの停止

CA Business Service Insight をインストールする前に、タスク マネージャのプロセスリストで実行中の **JAVA** プロセスを確認し、インストールの開始前にそれらをすべて停止します。

アップグレード時には、CA Business Service Insight に属するサービス(すべての「Oblicore」サービス)をすべて停止します。さらに、すべての **JAVA** プロセス (ACE2、Oblisync、および Tomcat)も停止します。

インストールおよび地域の設定

地域と言語の設定が英語以外のときに、インストール コマンドが変更されてインストールが中断する場合があります。

地域と言語の設定が英語以外のときは、一時的に設定を[英語(米国)]に変更し、以下のインストール手順に従ってください。

1. CA Business Service Insight をインストールする前に、地域の設定を[英語(米国)]に変更します。
2. このガイドに記載されている手順に従ってインストールします。
3. 再起動します。
4. 地域の設定を元に戻します。
5. 再起動します。
6. CA Business Service Insight を使用します。

CA Business Service Insight へのアップグレード

このセクションでは、CA Business Service Insight にアップグレードして新機能を利用する方法について説明します。

注: アップグレードを実行するユーザは DBA であり SQL コマンドに精通している必要があります。

アップグレードの開始

1. サーバフォルダ内の `Cloud_Insight_Server_8.2.exe` をダブルクリックします。
[ようこそ]ウィンドウが表示されます。
2. [次へ]をクリックします。
[言語の選択]ダイアログ ボックスが表示されます。
3. インストール言語を選択して、[OK]をクリックします。
インストールの続行にアプリケーションが必要な場合は、それらがダイアログボックスにリスト表示されます。
4. [インストール]ボタンをクリックして、必要なプログラムを自動的にインストールします。
インストール ウィザードが表示されます。
5. [次へ] をクリックして続行します。
[エンド ユーザ使用許諾契約]ウィンドウが表示されます。
6. 使用許諾契約に目を通します。同意する場合は、[使用許諾契約の条項に同意します]を選択して[次へ]をクリックします。
[JBoss インストール設定]ウィンドウが表示されます。
7. サードパーティ CD の場所/パスを入力または参照し、[次へ]をクリックします。
注: JBoss がすでにインストールされており、ユーザが新しいバージョンをインストールする場合は、このインストールによって環境変数 "JBoss_HOME" が上書きされます。インストール後、環境変数は新しい JBoss を指すようになります。
注: 旧バージョンの JBoss のコンポーネントが検出された場合は、チェックボックスの選択画面が表示され、クリーンアップするコンポーネントを選択するように指示するメッセージが表示されます。
8. クリーンアップするには、目的のチェック ボックスを選択して[次へ]をクリックします。

a. クリーンアップなしで続行するには、[次へ]をクリックします。

アップグレード用のウィンドウが開き、インストールに応じたダイアログ ボックスが表示されます。

9. 「[アップグレード時のダイアログ ボックスと設定 \(P. 64\)](#)」セクションを参照し、インストール処理を続行します。
10. 選択が終了すると、[アプリケーションのインストール準備完了]ウィンドウが表示されます。
11. ここまでに選択した設定を確認して、[次へ]をクリックします。
[システムの更新]ウィンドウが表示され、インストールが開始されます。
[マイグレーション スクリプトの実行]チェック ボックスがオンになっている場合は、ウィンドウが表示されます。画面上の指示に従ってください。
12. インストールが終了すると、インストールの成功を知らせる確認ウィンドウが表示され、コンピュータを再起動するよう求められます(デフォルトでは、[はい]が選択されています)。
13. [完了]をクリックします。
システムが再起動します。

トポロジ タイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
1 台のサーバ	データベース、アプリケーション、および Web コンポーネントは同じサーバにインストールされます。	このサーバ上で Cloud_Insight_Server_8.2.exe を実行。
2 台のサーバ	2 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーションと Web コンポーネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーションと Web サーバのインストール。
3 台のサーバ	3 台のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーション コンポーネント ■ 3 台目のサーバ: Web コンポーネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーション サーバのインストール。 ■ Web サーバのインストール。

トポロジ タイプ (サーバ数)	説明	インストール 順序(各サーバ)
4 台以上のサーバ	4 台以上のサーバに分散 ■ 1 台目のサーバ: データベース コンポーネント ■ 2 台目のサーバ: アプリケーション コンポーネント ■ 3 台目のサーバ: Web コンポーネント ■ 4 台以上のサーバ: 追加のアプリケーション コンポーネント	新規インストール ■ データベース サーバ上のデータベースの作成。 ■ アプリケーション サーバのインストール。 ■ Web サーバのインストール。 ■ 追加のアプリケーション コンポーネントのインストール。

アップグレード ダイアログ ボックスおよびその設定

以下の表では、インストール中に表示されるアップグレード ダイアログ ボックスとその関連情報(パラメータ、値)のリストを示します。

注: 選択した機能に関連するダイアログ ボックスのみが表示されます。関連付けられた機能が選択されていない場合、ダイアログ ボックスは表示されません。たとえば、ユーザが[データベース]機能を選択していなければ、[データベース作成]ダイアログ ボックスは表示されません。

1. 表示される各ダイアログ ボックスで、各パラメータに対する値を入力して[次へ]をクリックします。

注: ダブル ダガー(‡)が付いているエントリはダブル バイト文字を使用することはできません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件(例: ASCII)および制限(特殊文字、ダブルバイト文字など)については、Oracle の資料を参照してください。

注: 組織名にはダブル バイト文字を含めることができません。

ダイアログ ボックス名	パラメータ	値	特記事項
データベース 作成	マイグレーション スクリ プトの実行	オンまたはオフ	CA Business Service Insight ア ラート サービスがインストールさ れたアプリケーション サーバで は、このチェックボックスが自動 的にオンになります。
	Oblicore データベース インスタンス TNS 名	TNSNAMES.ORA ファイルに 表示されているとおりに TNS 名を入力します。‡	CA Business Service Insight デー タベース インスタンス TNS 名。
	スキーマ ユーザ名	アップグレードのためのス キーマ ユーザの名前を入 力します。	パスワードは通常 Oblicore で す。
	スキーマのパスワード	アップグレードに使用して いるスキーマ ユーザのパ スワードを入力します。	
	システム パスワード	システム ユーザ パスワード を入力します。	このパスワードを持っていない場 合、「開始前の確認事項」を参照 してください。

ダイアログ ボックス名	パラメータ	値	特記事項
ログオン情報	ユーザ名	ユーザの名前。‡	デフォルト値: インストールを実行したアカウントのユーザ。ユーザとパスワードを専用ドメインアカウントに変更することを推奨します。
	パスワード	ユーザのパスワード。‡	
	[新規ユーザの情報]ボタン	[新規ユーザ情報]行を参照。	
新規ユーザ の情報	ドメインまたはサーバ	ローカル サーバの名前。	
	グループ	管理人	
	ユーザ名	ユーザの名前。	
	パスワード	ユーザのパスワード。	会社の方針に準拠します。
	パスワードの確認	パスワードの確認。	

設定ファイルとそれに関連したパラメータを以下の表に示します。

注: 以下の設定テーブル内のいずれのエントリに対しても、ダブル バイト文字を割り当てないでください。

注: また、Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件 (例: ASCII) および制限 (特殊文字など) については、Oracle の資料を参照してください。

設定ファイル	パラメータ	デフォルト値	特記事項
Config_Ini.ini	ORGANIZATION_NAME	組織名	組織名に特殊文字(& など)が含まれている場合は、その特殊文字の前に ^ 文字を挿入します (たとえば、AB&C の場合は、「AB^&C」と表記します)。
	TEMPLATE_PATH*	'<インストール ディレクトリ>¥Export Templates¥'	エクスポートテンプレートフォルダの場所

設定ファイル	パラメータ	デフォルト値	特記事項
	BOOKLET_TEMPLATE_PATH*	'<インストール ディレクトリ>¥Booklet Templates¥'	ブックレット テンプレート フォルダの場所
	WEB_SERVER	Web サーバの名前	
	DB_NAME		
	OBLICORE_USER		
	OBLICORE_PASS	Oblicore	データベースにおける CA Business Service Insight ユーザ パスワード
	MPX_CONFIGURATION_DIRECTORY*	'<インストール ディレクトリ>¥Packages¥Configuration¥'	パッケージ設定フォルダの場所
	MPX_INPUT_DIRECTORY*	'<インストール ディレクトリ>¥Packages¥'	パッケージ入力フォルダの場所
	MPX_LOG_DIRECTORY*	'<インストール ディレクトリ>¥Packages¥Log¥'	パッケージ ログ フォルダの場所
	MPX_OUTPUT_DIRECTORY*	'<インストール ディレクトリ>¥Packages¥'	パッケージ出力フォルダの場所
	MPX_TEMP_DIRECTORY*	'<インストール ディレクトリ>¥Packages¥Temp¥'	パッケージ一時フォルダの場所

: * これらのパラメータの入力値は、一重引用符で始まり、円記号と一重引用符で終わる必要があります (例: 'C:¥Temp¥')。

タイムゾーン ツール

ACE2 へマイグレートするメトリックにはすべて、タイムゾーン定義が必要です。

ACE タイムゾーン ツールは、アプリケーション サーバのインストール中に ACE データベースのマイグレーションおよびアップグレード処理の一部として起動します。

システムのメトリックに含まれるタイムゾーン定義に、対応するタイムゾーン名がない場合、ツールにより警告の通知が表示されます。インストール ログにもメッセージが表示されます。

データベース接続の問題によるエラーが発生すると、ツールはログ ファイル (%OG_HOME%\bin) を作成し、ログ テーブルに警告メッセージを書き込みます。

インストール後の作業(アップグレード時)

このセクションでは、アップグレードを完了して **CA Business Service Insight** を再起動するために、アップグレード後に実行する必要がある作業について説明します。

以下の手順に従います。

1. Web サイトを起動します。
2. (オプション)パブリックシノニムからプライベートシノニムに変更するには、データベース上で以下のいずれかのプロシージャを呼び出します。

```
begin
prc_recreate_all_synonyms ('YES');
end
```

または

```
exec prc_recreate_all_synonyms ('YES');
```

3. (オプション)データベースで **OBLIDBADMIN** アカウントをロックするには、**sysdba** としてデータベースに接続されている状態で以下を実行します。

```
alter user oblidbadmin account lock
```

4. (オプション) **OBLIDBADMIN** パスワードを変更するには、**sysdba** としてデータベースに接続されている状態で以下を実行します。

```
alter user oblidbadmin identified by '<new_password>'
```

5. タイムゾーン用に選択した時間オフセット(**GMT** からの時間)が選択したタイムゾーン名の時間オフセットの定義と一致することを確認します。夏時間の期間の開始日と終了日を設定する場合は、必ず選択したタイムゾーンの国で定義されている正確な日付を設定します。これらのフィールドのどちらか一方に正確な情報が入力されていないと、システムの誤動作が発生したり、メトリック計算に必要以上に時間がかかったりすることになります。
 - a. **ACE2** またはコンテンツ転送をインストールした場所で、**%OG_HOME%\log** に移動し、ファイル **ace2_wrapper.log** または **oblisync_wrapper.log** を開きます。メトリック登録情報フォーマットに関するメッセージがログに表示される場合、**%OG_HOME%\bin** に移動して、**MigrateClusterMetrics.exe** を実行します。実行が完了すると、サービスの起動が再開されます。
6. (オプション)リバースプロキシによって Web サイトに転送されたリクエストをサポートするには、**web.config** ファイルの **AppSettings** セクション内の **ProxyPrefix** キーの値にプレフィックス文字列を指定します。このプレフィックス文字列は、プロキシ設定で Web サイトにリクエストをルーティングするように設定されています。

- a. プロキシの値が正しいスペルで入力され、その前後にスラッシュがあることを確認して(例: `/prefix/`)、Web サイトがリバース プロキシに正しくルーティングされるようにします。

たとえば、Web サイトにマッピングされたプレフィックスが「ca」の場合、web.config ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
<add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

ProxyPrefix キーが存在しない場合やその値が空の文字列の場合、Web サイトは標準モードで動作します。

- b. プロキシ設定にヘッダを追加します。ヘッダ キーは、「X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy」と指定する必要があります。

たとえば、Oblicore Web アプリケーションのプロキシ アクセス URL が `http://proxy/ca/` の場合(ca はプレフィックスです)、web.config ファイルは以下のように更新されます。

```
<appSettings>
<add key="ProxyPrefix" value="/ca/" />
</appSettings>
```

この更新のほかに、「X-Forwarded-CA-Oblicore-Proxy」というキー名の新しいヘッダがプロキシ Web アプリケーション設定に追加されます。

7. 現在のバージョンに行われた変更を反映させるために API インターフェースを更新します(詳細については、「CA Business Service Insight SDK ガイド」の「API Backwards Compatibility」を参照してください)。8.1 より前のバージョンからの API コードを使用する場合、この手順は必須です。

バージョン 8.x への API の更新

1. 8.2 の WSDL を使用して、契約サービス、ポートフォリオ サービス、およびリポジトリ サービス用のプロキシ クラスを作成します。8.0 より前のバージョンからアップグレードしている場合は、最後にインストールしたバージョンの WSDL を使用します。
2. API コードを再コンパイルします。

コンパイル エラーが発生した場合:

1. 手動で変更する必要があるコードを特定し、新しい API に加えられた変更(フィールドの順序やタイプなど)に従って更新します。
2. 変更内容を反映した後で API コードをもう一度コンパイルします。

アップグレード ログ ファイル

旧バージョンからアップグレードするとき、CA Business Service Insight により 2 つのログ ファイルが生成されます。

OG8.xMigration.log

- **OG8.xMigration.log** ファイルは常に存在し、最後の実行時のエントリのみが含まれます。
- 最初のアップグレード(または、以前のアップグレード時のログファイルが存在しないとき)では、すべてのアップグレード ログ エントリがここに書き込まれます。最初のアップグレードが完了した時点では、他のログ ファイルは存在しません。
- 2 回目のアップグレードを開始するとき(または、ログ ファイル **OG8.xMigration.log** がすでに存在するとき)、このファイルの内容は、アップグレードの開始前に **OG8.xMigrationHist.log** ファイルに移動および追加されます。

OG8.xMigrationHist.log (アップグレード履歴)

- ファイル **OG8.xMigrationHist.log** はアップグレード履歴ファイルです。2 回目のアップグレードで作成され、現在のアップグレードより前のすべてのアップグレードのエントリが含まれます。
- 各アップグレードの開始時に、**OG8.xMigration.log** の内容(以前のアップグレード)が、このファイルに移動および追加されます。

第 5 章: パスワード更新ユーティリティ

パスワード更新ユーティリティは、CA Business Service Insight サービス、CA Business Service Insight COM+ エンジン、および Oracle DB 内のパスワードを変更します。このユーティリティは CA Business Service Insight バージョン 8.x 以降で動作します。

以下のいずれかのパスワードを変更した後に、パスワード更新ユーティリティを実行します。

Windows パスワード

Windows パスワードを変更した後に、パスワード更新ユーティリティを実行し、新しいパスワードを入力します。このユーティリティは、入力するパスワードに基づいて、サービスアカウント、パスワード、および COM+ エンジンの認証情報を変更します。ユーザアカウントの認証情報を使用しており、「ローカル システム」アカウントを使用していない CA Business Service Insight サービスのみが変更されます。

Oracle の認証情報

パスワード更新ユーティリティを使用して、CA Business Service Insight で使用されるさまざまなデータベース ユーザの Oracle DB パスワードを変更することができます。

- Sla、Mtn、Csl、Edr、Psl、Rpt 'Obl'

注: Obl (oblicore) のパスワードを変更すると、ユーティリティによって registry.xml および以下の 2 ファイルが変更されます。

- oblisync-ds.xml
- ace2-ds.xml

注: 'insight' ユーザの DBSource.properties も変更されます。

クリーン インストールでは、ユーティリティのパスは以下のとおりです。
C:¥Program Files¥CA¥Cloud Insight¥Utilities¥PassUpdate¥PassUpdate.exe.

アップグレード インストールでは、ユーティリティのパスは以下のとおりです。
C:¥Program Files¥Oblicore¥Utilities¥PassUpdate¥PassUpdate.exe.

第 6 章: カスタム インストール

カスタム インストールの実行方法を以下に示します。カスタム インストールを使用するのは、4 台以上のサーバのインストールの場合、または CA サポートがこのオプションを推奨している場合です。

以下の手順に従います。

1. [参照]をクリックして送信先フォルダを選択/作成し、[次へ]をクリックします。

または

[次へ]をクリックしてデフォルトの送信先フォルダを使用します。[機能の選択]ウィンドウが表示されます。インストールする機能を選択します。

注: 別々のサーバに CA Business Service Insight サービスを分配したりアダプタを配置したりする場合は、「[アプリケーション サーバの追加インストール \(P. 43\)](#)」を参照してください。

2. インストールするコンポーネントを選択して[次へ]をクリックします。以下の表と「カスタム インストール ダイアログ ボックス (74P.)」を参照しながら、選択した機能に基づくインストール処理を続行します。

選択したサーバ	関連するウィンドウ
データベース	データベース作成
データベース + アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース作成]
アプリケーション	[ログオン情報]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]
アプリケーション + Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[サービス起動タイプ]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]
Web	[ログオン情報]、[Web サイト設定]、[ログ サーバ設定]、[データベース接続]

3. 選択が終了すると、[アプリケーションのインストール準備完了]ウィンドウが表示されます。ここまでの設定の内容を確認します。[次へ]をクリックします。

[システムの更新]ウィンドウが表示され、インストールが開始されます。

データベースを作成するように設定した場合は、インストール処理中にコマンドライン ウィンドウが表示されます。

4. 画面上の指示に従ってください。

注: 新しいデータベースを自動的に作成しない場合は、「[新しいデータベースの手動作成 \(P. 32\)](#)」を参照してください。

5. インストールが終了すると、インストールに成功したことを知らせる確認ウィンドウが表示され、コンピュータを再起動するよう求められます(デフォルトでは、[はい]が選択されています)。**[完了]**をクリックします。システムが再起動します。

カスタム インストール ダイアログ ボックス

以下の表では、インストール中に表示されるカスタム インストール ダイアログ ボックスとその関連情報(パラメータ、値)のリストを示します。

表示される各ダイアログ ボックスで、各パラメータに対する値を入力して[次へ]をクリックします。

注: 選択した機能に関連するダイアログ ボックスのみが表示されます。関連付けられた機能が選択されていない場合、ダイアログ ボックスは表示されません。たとえば、ユーザが[データベース]機能を選択していなければ、[データベース作成]ダイアログ ボックスは表示されません。

注: ダブルダガー(‡)が付いているエントリはダブルバイト文字を使用することはできません。

注: Oracle の命名規則では、特定の文字の使用がサポートされていません。Oracle の特定の要件(例: ASCII)および制限(特殊文字、ダブルバイト文字など)については、Oracle の資料を参照してください。

注: 組織名にはダブルバイト文字を含めることができません。

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
データベース作成	■ Oracle バージョン ■ データベースファイルの場所 ■ データベースサーバ名 ■ 文字セット ■ シノニム	■ デフォルト値: サーバのデフォルト値 ■ データベースファイルの配置場所 ‡ ■ データベースサーバの名前 ‡ ■ UTF8 または MSWIN ■ Public または Private	[ユーザの選択]ウィンドウの使用中に Microsoft 標準の[ネットワーク パスワードの入力]ウィンドウが何度も表示されることがあります。ドメインにログインしていないと、このウィンドウが表示される場合があります。必要に応じて、有効なドメインユーザおよびパスワードを入力してドメインにアクセスします。
データベース接続	Oracle バージョン	10 または 11	デフォルト値: サーバのデフォルト値

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
	CA Business Service Insight データベース インスタンス TNS 名 ‡		TNSNAMES.ORA ファイルに表示されているとおりに TNS 名を入力します。
ログオン情報	ユーザ名	ユーザの名前	デフォルト値: インストールを実行したアカウントのユーザ。ユーザとパスワードを専用ドメイン アカウントに変更することを推奨します。
	パスワード	ユーザのパスワード	
	[新規ユーザの情報] ボタン	[新規ユーザの情報]の行を参照	
ログ サーバ環境設定	ログ サーバ ネットワーク アドレス	ログ サーバがインストールされているアドレス	ログ サーバがローカル ホスト上にない場合は、アドレスを適切なサーバに変更します。 注: アドレスはログ サーバのインストール先のアドレスである必要があります。
	ログ サーバ ネットワーク ポート	ログ サーバで使用されているポート	デフォルト: 4040
新規ユーザの情報	ドメインまたはサーバ	ローカル サーバの名前	
	グループ	管理人	
	ユーザ名	ユーザの名前	
	パスワード	ユーザのパスワード	会社の方針に準拠します。
	パスワードの確認	パスワードの確認	
サービス起動タイプ	自動		システムの起動時に自動的に起動するようにすべてのサービスが設定されます。

ウィンドウ名	パラメータ	値	特記事項
	手動		デフォルト値: システムの起動時に手動で起動するようにすべてのサービスが設定されます。 注: ログ サーバ サービスは常に[自動]に設定されます。
ログ サーバ環境設定	ログ サーバ ネットワーク アドレス	ログ サーバがインストールされているアドレス	ログ サーバがローカル ホスト上にない場合は、アドレスを適切なサーバに変更します。 注: アドレスはログ サーバのインストール先のアドレスである必要があります。
	ログ サーバ ネットワーク ポート	ログ サーバで使用されているポート	デフォルト: 4040
Web サイト設定	WWWRootfolder	WWWRoot フォルダの場所 ‡	デフォルト値: Web サイトが現在インストールされているフォルダ
	SessionDataFolder	SessionDatafolder フォルダの場所 ‡	デフォルト値: インストールディレクトリ
	SessionTimeout	セッションがタイムアウトになるまでの時間	デフォルト: 300

第 7 章：高可用性

このセクションでは、高可用性の概要を提供し、以下の方法について説明します。

- 高可用性環境における CA Business Service Insight の新規インストール。
- 高可用性環境における CA Business Service Insight 8.2 へのアップグレード。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[概要](#) (P. 78)

[新規インストール](#) (P. 81)

[旧バージョンからのアップグレード](#) (P. 88)

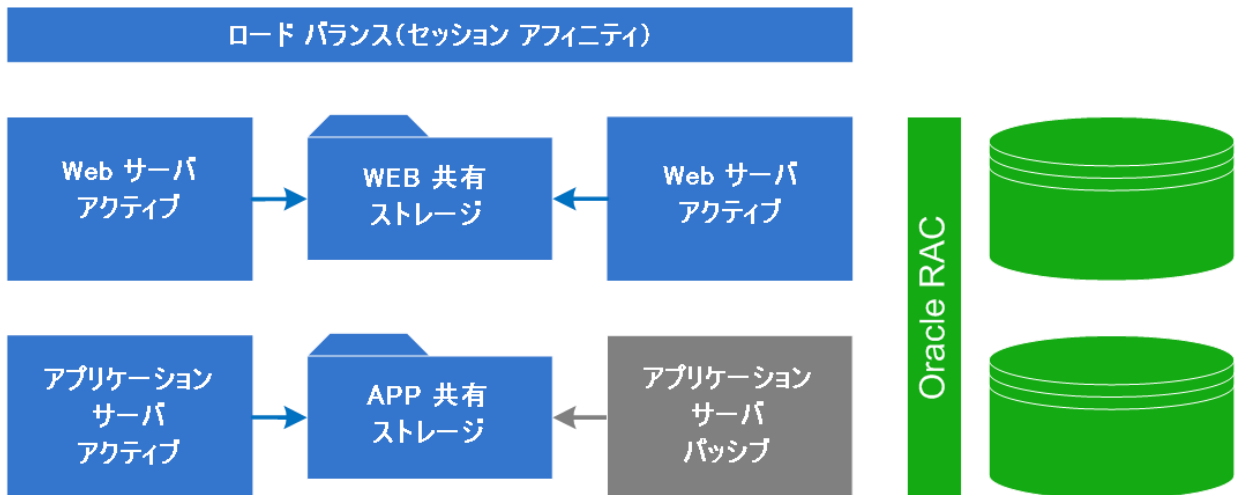
[追加情報](#) (P. 97)

概要

高可用性環境での CA Business Service Insight のインストールは、Windows クラスタテクノロジーおよび Windows ネットワーク負荷分散 (NLB) テクノロジーに基づきます。インストールにはアプリケーション、Web およびアダプタ コンポーネントが含まれます。

アプリケーションの各サーバは、以下のソリューションを提示します。

- データベース サーバは顧客から提供され、通常は Oracle RAC 展開です。
- アプリケーション サーバは Active/Passive として展開されます。
- Web サーバは、Web セッション アフィニティを用いた負荷分散を利用して、Active/Active として展開されます。



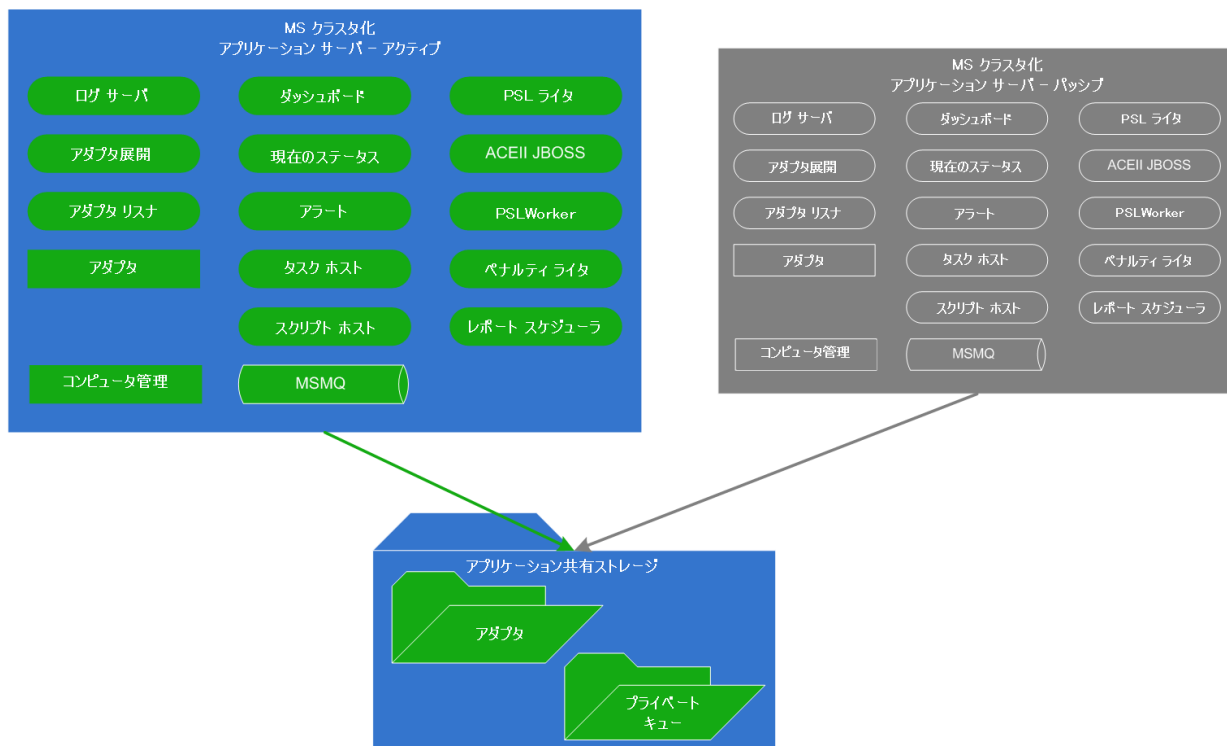
Web サーバおよびアプリケーション サーバの両方は、ノード間のファイルを共有するために高可用性を持つ共有ファイルシステムを要求します。このシステムは顧客によって、高可用性の要求に応じるあらゆるストレージのオペレーティング環境で提供されます。

データベース サーバ

Oracle データベースのみがサポートされています。高可用性を構成するには Oracle RAC を展開します。

アプリケーション サーバ

アプリケーション サーバはアクティブ/パッシブ モードで展開されます。これは、いずれの時点でも、アプリケーション サーバ上で実行されているサービスが、複数のサーバのうちの 1 つでのみ実行されることを意味します。



基本の高可用性インフラストラクチャは、アクティブ サーバからパッシブ サーバへのサービスのフェールオーバーを実行するよう設定されます。

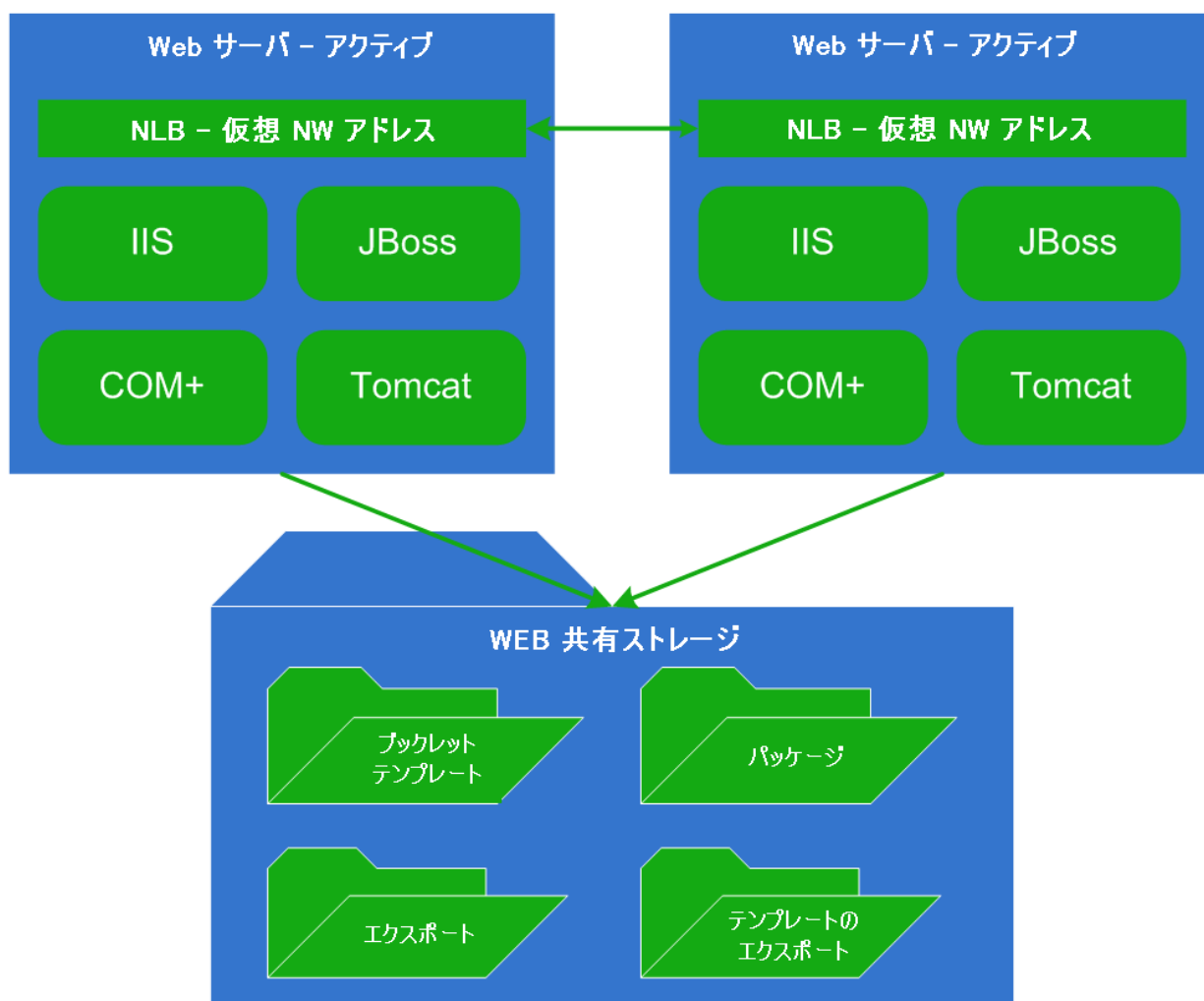
アプリケーション サーバ内の共有データはアダプタ設定、状態ファイル、および MSMQ データ ファイルから構成されます。

Web サーバ

Web サーバは **Active/Active** として展開されます。これは、すべての Web サーバが同時にアクティブであり、必要に応じてクライアントとして対応することを意味します。

Web サーバは IIS セッションにデータを格納するため、NW 負荷分散は Web サーバをクライアントに割り当てる際にアフィニティを使用する必要があります。大半のロード バランサはこの機能をサポートします。

Tomcat の下で実行されている **SMI GUI** コンポーネントは、従来の Oblicore Web サーバによって使用される状態を使います。



新規インストール

このセクションでは、Windows 2008 オペレーティング環境における高可用性環境で、CA Business Service Insight を新規インストールする方法について説明します。

前提条件

このセクションは、高可用性環境で CA Business Service Insight を新規インストールするための前提条件を示します。

1. すべてのサーバ用の前提条件がすべて準備されていることを確認します。詳細については、標準の「前提条件」を参照してください。
2. 新しいデータベースの作成 詳細については、「[新しいデータベースの手動作成 \(P. 32\)](#)」を参照してください。
3. 割り当てられた DNS 名を持つ 4 つの静的 IP アドレスを準備します。

アプリケーション サーバのインストール。

このセクションでは、アプリケーション サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アプリケーション クラスター ノード マシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「標準インストールの実行」を参照してください。）
3. 1 台目のアプリケーション クラスター ノード マシンを再起動します。
4. 各アプリケーション クラスター ノード マシンで、手順 1-3 を繰り返します。

Web サーバのインストール

このセクションでは、Web サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の Web クラスタ ノード マシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「標準インストールの実行」を参照してください。）
3. 1 台目の Web クラスタ ノード マシンを再起動します。
4. 各 Web クラスタ ノード マシンで、手順 1-3 を繰り返します。

アダプタ サーバのインストール

このセクションでは、CA Business Service Insight アダプタ サーバをインストールする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目のアダプタ クラスタ ノード マシンに接続します。
2. CA Business Service Insight のインストールを実行します。（「[カスタムインストールの実行](#) (P. 71)」を参照してください。）
3. 1 台目のアダプタ クラスタ ノード マシンを再起動します。
4. 各アダプタ クラスタ ノード マシンで、手順 1-3 を繰り返します。

設定

新規インストールを行った後、アプリケーション サーバ、Web サーバ、およびアダプタ サーバ上で以下のアクティビティを実行します。

注: 設定に 4 つの IP アドレスが利用可能であることを確認します (前提条件に記載されているとおり)。

設定: アプリケーション サーバ

このセクションでは、CA Business Service Insight アプリケーション サーバの設定 アクティビティについて説明します。

以下の手順に従います。

1. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。
2. コンソール ツリーの[サービスとアプリケーション]をクリックします。
3. [その他のアクション]から[空のサービスまたはアプリケーションの作成]をクリックします。
4. 以下のグループを作成します。
 - CA Business Service Insight、サービス
 - CA Business Service Insight、現在のステータス
 - CA Business Service Insight、ACE1 Writer
 - CA Business Service Insight、ACE2 Worker
5. CA Business Service Insight サービス グループをクリックします。
6. [リソースの追加]-[ジェネリック サービス]に移動し、ドロップダウンリストから以下のリソースを追加します。リソースを選択し、次に[終了]をクリックします。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ
 - Oblicore - アダプタリスナ
 - Oblicore - アラート
 - Oblicore - ダッシュボード エンジン
 - Oblicore - ログ サーバ
 - Oblicore - PenaltyWriter
 - Oblicore - ScriptHost
 - Oblicore - タスク ホスト
 - Oblicore - レポート スケジューラ
7. CA Business Service Insight サービス グループをクリックします。
8. [リソースの追加]-[クライアント アクセス ポイント]に移動し、ネットワーク名 および IP アドレスの入力を入力します。この操作にはしばらく時間がかかります。設定が完了するまで終了させないでください。

9. [次へ]-[次へ]-[終了]をクリックします。
10. リスト内の各リソースについて、これらの手順を実行します。
 - a. リソースをダブルクリックします。
 - b. [依存関係]タブに移動します。
 - c. アクセス ポイント ネットワーク名を選択して、[OK]をクリックします。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ
 - Oblicore - アダプタリスナ
 - Oblicore - ダッシュボード エンジン
11. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight- 現在のステータス グループに追加します。
12. Oblicore - PSLWriter リソースを CA Business Service Insight - ACE1 Writer グループに追加します。
13. リソースを作成し、追加の各 PSIWriter サービスの CA Business Service Insight ACE1 Writer グループに追加します。
14. Oblicore - PslWorker1 リソースを CA Business Service Insight - ACE2 Worker グループに追加します。
15. メッセージ キュー サービスを以下のとおり追加します。
 - a. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。
 - b. コンソール ツリーに移動し、[サービスとアプリケーション]をクリックします。
 - c. [サービスまたはアプリケーションの構成]をクリックします。高可用性ウィザードが表示されます。
 - d. [メッセージ キュー]を選択して、[次へ]をクリックします。
[クライアント アクセス ポイント]ページが表示されます。
 - e. [名前]に値を入力し、[アドレス]に利用可能な IP アドレスを入力して、[次へ]をクリックします。
[記憶域の選択]ページが表示されます。
 - f. ディスクリソースをクリックし、[次へ]をクリックします。
[確認]ページが表示されます。
 - g. [次へ]をクリックします。

[概要]ページが表示されます。

- h. [完了]をクリックします。
- i. サーバー マネージャを開きます。[機能]-[メッセージ]-[専用キュー]に移動します。各アプリケーション ノード マシンで、[専用キュー]ストレージフォルダで見つかったすべてのキューを削除します。
- j. フェールオーバー クラスタ管理プログラムを開きます。[メッセージキュー サービス]を右クリックし、[メッセージ キュー]-[専用キュー]を開きます。各アプリケーション ノード マシンで、[専用キュー]ストレージフォルダで見つかったすべてのキューを削除します。
- k. [メッセージキュー サービス]を右クリックし、[MSMQ の管理]-[メッセージキュー]-[専用キュー]を開きます。[専用キュー]をクリックし、以下を作成します。
 - OG アラート
 - OG アダプタリスナ
 - OG ダッシュボード
 - OG 現在のステータス
- l. データベース内のキュー アクセス ネットワーク名を、MSMQ クラスタ化 ネットワーク アドレスに更新します。このプロセスは、[管理]-[サイト設定]-[詳細]-[キュー]に移動して、CA Business Service Insight UI により実行することができます。

[キュー]ウィンドウが表示されます。

次のパラメータがリスト表示されます: 現在のステータス MSMQ マシン、ダッシュボード MSMQ マシン、デフォルト MSMQ マシン。必要に応じて値を更新します。

16. すべてのリソースをオンラインにします。

設定: Web サーバ

使用する重要なテンプレートおよび事前定義済みコンテンツを **Web** サーバにロードするために、以下の設定を実行する必要があります。

注: ネットワーク負荷分散を作成するには、Microsoft TechNet ガイドの手順 ([http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833(WS.10).aspx)) に従います。

以下の手順に従います。

1. [Program Files]-[Oblicore]を選択します。
2. ブックレットテンプレートフォルダ、エクスポートのテンプレートフォルダ、およびパッケージフォルダを **Web** 共有フォルダにコピーします。
3. GUI から更新します。メニューから[管理]-[サイト設定]-[詳細]-[レポート]-[ブックレットのパス]をクリックします

設定: アダプタ サーバ

以下の設定アクティビティ以下の設定アクティビティが CA Business Service Insight アダプタ サーバ上で実行される必要があります。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノード マシンに接続します。
2. フェールオーバー クラスタ 管理 プログラムを開きます。
3. コンソール ツリー内で、[サービスおよびアプリケーション]をクリックします。
4. [その他のアクション]から[空のサービスまたはアプリケーションの作成]をクリックします。
5. [Oblicore - アダプタ展開]をクリックします。
6. [その他のアクション]-[リソースの追加]-[ジェネリック サービス]から、Oblicore – アダプタ展開リソースを追加します。
7. ¥Program Files¥Oblicore¥Adapters and copy the SqlAdapter.exe に移動し、ディスク S 上のアダプタ フォルダ (クラスタ化された共有フォルダ) にファイル SqlAdapter.exe および TextFileAdapter.exe をコピーします。
8. レジストリ エディタを開き、[HKEY_LOCAL_MACHINE]-[SOFTWARE]-[Oblicore]-[アダプタ]に移動します。AdaptersDir 文字列に値 S:¥Adapters が含まれることを確認します。含まれていない場合、この値に変更します。
9. 各アダプタ クラスタ ノード マシンで、手順 8 を繰り返します。
10. リソースを右クリックし、[このリソースをオンラインにする]を選択します。

旧バージョンからのアップグレード

このセクションでは、Windows 2003 オペレーティング環境における高可用性環境で CA Business Service Insight にアップグレードする方法について説明します。

プロセスはアプリケーション サーバ、Web サーバ、次にアダプタ サーバのシーケンスで処理されます。

注:

- アプリケーション サーバの適切なフェールオーバーのために十分なプロセスおよびセッションがデータベース サーバで定義されていることを確認します。非高可用性環境に関してはプロセスおよびセッションを 2 倍にすることを推奨します。
- 前述のとおり、アップグレード処理はシーケンスに沿って実行されます。そのため、この処理は同時に実行せず、1 度にマシン 1 台ずつアップグレードを実行します。

アプリケーション サーバのアップグレード

このセクションでは、アプリケーション サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. CA Business Service Insight インストール ガイドドキュメントに記載されているとおり、すべての前提条件の手順を実行します。[\(旧バージョンからのアップグレード \(P. 61\)\)](#)を参照してください。
2. 1 台目のアプリケーション クラスター ノード マシンに接続します。
3. クラスター アドミニストレータ プログラムを開きます。
4. [操作]で、[クラスターへの接続を開く]を選択します。
5. [クラスターまたはサーバ名]で、アプリケーション クラスター名を選択して[OK]をクリックします。
6. クラスター グループおよび共有フォルダ上で、最初のアプリケーション クラスター ノードがすべての Oblicore サービスの所有者であることを確認します。
7. 各 CA Business Service Insight サービスのクラスター化グループを右クリックして、[オフラインにする]を選択します。
8. 共有フォルダを右クリックして、[オフラインにする]を選択します。
9. クラスター グループがオンラインであり、最初のアプリケーション クラスター ノードが所有者であることを確認します。
10. CA Business Service Insight のインストールを実行します。[\(旧バージョンからのアップグレード \(P. 61\)\)](#)を参照してください。
11. 1 台目のアプリケーション クラスター ノード マシンを再起動します。
12. 各アプリケーション クラスター ノード マシンで上記手順を繰り返し、これが所有者であることを確認します。

Web サーバのアップグレード

このセクションでは、Web サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. すべての前提条件の手順を実行します。(HA の「[前提条件](#) (P. 81)」を参照)。
2. 1 台目の Web ノード マシンに接続します。
3. CA Business Service Insight のインストールを実行します。([旧バージョンからのアップグレード](#) (P. 61)を参照してください)。
4. 1 台目の Web ノード マシンを再起動します。
5. 各 Web ノード マシンで、手順 1-4 を繰り返します。

アダプタ サーバのアップグレード

このセクションでは、CA Business Service Insight アダプタ サーバをアップグレードする方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノード マシンに接続します。
2. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
3. [アクション]で[クラスタへの接続を開く]選択します。
4. クラスタまたはサーバでアダプタ クラスタ名を選択し、[OK]をクリックします。
5. クラスタ グループおよび共有フォルダ上で、最初のアダプタ クラスタ ノードがすべての Oblicore サービスの所有者であることを確認します。
6. クラスタ グループおよび共有フォルダがオンラインであることを確認します。
7. すべてのアダプタ サービスをオフラインにします。
8. CA Business Service Insight のインストールを実行します。(「[CA Business Service Insight へのアップグレード \(P. 61\)](#)」を参照してください)。
注: 分散トランザクション コーディネータ サービスが開始されていないというメッセージが表示された場合、[無視]をクリックします。
9. 1 台目のアダプタ クラスタ ノード マシンを再起動します。
10. 各アダプタ クラスタ ノード マシンで、手順 2-8 を繰り返します。現在のアダプタ クラスタ ノードが所有者であることを確認します。

サーバの設定

アップグレード後に、アプリケーション サーバ、Web サーバ、およびアダプタ サーバで以下のアクティビティを実行します。

アプリケーション サーバの設定

アプリケーション サーバで、以下の設定をリストされた順に実行する必要があります。どの手順もスキップしないでください。

ここでは **MSMQ** キューを設定します。

以下の手順に従います。

1. 各 **CA Business Service Insight** アプリケーション ノード マシンで、[専用 キュー]ストレージフォルダで見つかったすべてのキューを削除します。
2. 以下のとおり、クラスタで動作するよう **MSMQ** を設定します。(詳細については、**Microsoft** の **Web** サイトを参照してください。)
3. **MSTDC** リソースがクラスタ化されていることを確認します。
4. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開くことにより、**MSMQ** リソースおよびグループ (仮想サーバ) の作成および設定を行います。
5. [操作]で、[クラスタへの接続を開く]を選択します。
6. [クラスタまたはサーバ名]で、アプリケーション クラスタ名を選択します。
7. コンソール ツリー内で、[クラスタ グループ]をクリックします。

このセクションでは **MSMQ** リソースを追加します。

以下の手順に従います。

1. [ファイル]-[新規]-[リソース]に移動します。
2. 新しいリソースウィザードで、[名前]に「クラスタ化 **MSMQ**」と入力します。
3. [リソース タイプ]リスト ボックスで、[メッセージ キュー]を選択し、[次へ]をクリックします。
4. [実行可能な所有者]ページで、[次へ]をクリックします。
5. [依存関係]ページの利用可能なリソースの下から、タイプがネットワーク名であるリソースを選択して[追加]をクリックします。
6. ディスク S (タイプが物理ディスクのリソース)を選択し、[追加]をクリックします。
7. [完了]をクリックします。

このセクションでは一般リソースを追加します。

以下の手順に従います。

1. 「クラスタ化 MSMQ」リソースをオンラインにします。
2. コンソール ツリー内で、[クラスタ グループ]をクリックします。
3. [ファイル]-[新規]-[リソース]に移動します。
新しいリソース ウィザードが開きます。
4. [名前]に「クラスタ化コンピュータの管理」と入力します。
[リソースの種類]リスト ボックスが表示されます。
5. [汎用アプリケーション]を選択し、[次へ]をクリックします。
[実行可能な所有者]が表示されます。
6. [次へ]をクリックします。
7. [依存関係]ページが表示されます。
8. [利用可能なリソース]に移動し、種類が[ネットワーク名]のリソースを選択し、
[追加]をクリックします。
9. 「クラスタ化 MSMQ」リソースを選択し、[追加]をクリックします。
10. [次へ]をクリックします。
11. コマンドラインで「mmc compmgmt.msc」と入力します。
12. 現在のディレクトリで「%windir%\system32」と入力します。
13. [ネットワーク名をコンピュータ名に使用する]チェック ボックスと[デスクトップとの対話をアプリケーションに許可する]チェック ボックスをオンにします。
14. [次へ]をクリックしてから、[終了]をクリックします。
15. 「クラスタ化コンピュータの管理」リソースをオンラインにします。
[コンピュータの管理]コンソールが表示されます。

コンピュータの管理を表示するには、コンソール セッション(セッション 0)にログオンする必要があります。クラスタ化環境における MSMQ キューの管理には、MMC.V.exe も使用できます。詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

このセクションでは専用キューを設定します。

以下の手順に従います。

注: このプロセスは、6.1 SR3 または 6.3 SR4 からアップグレードする場合にのみ適用されます。

1. 開いている[コンピュータの管理]コンソールから、[サービスとアプリケーション]-[メッセージキュー]-[専用キュー]に移動し、以下の4つの専用キューを作成します。
 - OG アラート
 - OG アダプタリスナ
 - OG ダッシュボード
 - OG 現在のステータス
2. データベース内のキュー アドレスを、MSMQ クラスタ化ネットワーク アドレスに更新します。[管理]-[プリファレンス]-[詳細]-[キュー]に移動して、CA Business Service Insight の UI からアップグレードを実行します。[キュー]ウィンドウが表示されます。
3. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
4. [操作]で、[クラスタへの接続を開く]を選択します。
5. [クラスタまたはサーバ名]で、アプリケーション クラスタ名を選択します。
6. コンソール ツリー内で、[グループ]をクリックします。
7. [ファイル]-[新規]-[グループ]に移動します。
8. 以下のグループを作成します。
 - CA Business Service Insight - サービス
 - CA Business Service Insight - 現在のステータス
 - CA Business Service Insight - ACE1 Writer
 - CA Business Service Insight - ACE2 Worker
 - クラスタ グループ
9. CA Business Service Insight サービスグループをクリックします。

このセクションでは、必要な内部機能リソースを CA Business Service Insight に追加します。

以下の手順に従います。

注: ほとんどのリソースは存在しますが、古いグループ名が付けられています。グループを改訂して、新規インストールの名前と同じ名前にします。

1. [ファイル]-[新規]-[リソース]に移動します。以下のリソースを追加します。
 - Oblicore - Tomcat 6
 - Oblicore - ACE2 on JBoss アプリケーション サーバ
 - Oblicore - アダプタリスナ
 - Oblicore - アラート
 - Oblicore - ダッシュボード
 - Oblicore - ログ サーバ
 - CA Business Service Insight -サービス FQDN
 - Oblicore - PenaltyWriter
 - Oblicore - ScriptHost
 - Oblicore - タスク ホスト
 - CA Business Service Insight - サービス パブリック クラスタ IP
 - Oblicore - ReportsScheduler
2. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight- 現在のステータス グループに追加します。
3. Oblicore - PSLWriter リソースを CA Business Service Insight-ACE1 Writer グループに追加します。
4. Oblicore - Current_Status_Engine リソースを CA Business Service Insight-ACE2 Worker に追加します。
5. Oblicore - PslWorker1 リソースを CA Business Service Insight - ACE2 Worker グループに追加します。
6. すべてのリソースをオンラインにします。

Web サーバ設定

以下の設定アクティビティを Web サーバ上で実行する必要があります。

注: ネットワーク負荷分散を作成するには、Microsoft TechNet ガイドの手順 ([http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc754833(WS.10).aspx)) に従います。

以下の手順に従います。

1. [プログラム ファイル]-[Oblicore]に移動します。
2. ブックレット テンプレート フォルダ、エクスポートのテンプレートフォルダ、およびパッケージフォルダを Web 共有フォルダにコピーします。
3. GUI から更新します。メニューから[管理]-[サイト設定]-[詳細]-[レポート]-[ブックレットのパス]をクリックします

アダプタ サーバの設定

CA Business Service Insight アダプタ サーバが CA Business Service Insight の他の機能と同期できるようにするために、CA Business Service Insight アダプタ サーバ上で以下の設定アクティビティを実行する必要があります。

以下の手順に従います。

1. 1 台目の CA Business Service Insight アダプタ クラスタ ノード マシンに接続します。
2. クラスタ アドミニストレータ プログラムを開きます。
3. [パラメータ]タブ内の Oblicore - AdapterDeployment サービス名を AdapterDeployment に変更します。
4. ¥Program Files¥Oblicore¥Adapters and copy the SqlAdapter.exe に移動し、ディスク S 上のアダプタ フォルダ (クラスタ化された共有フォルダ) にファイル SqlAdapter.exe および TextFileAdapter.exe をコピーします。
5. レジストリ エディタを開き、[HKEY_LOCAL_MACHINE]-[SOFTWARE]-[Oblicore]-[アダプタ]に移動します。AdaptersDir 文字列に値 S:¥Adapters が含まれることを確認します。含まれていない場合、この値に変更します。
6. すべてのアダプタ サービスをオンラインにします。

追加情報

このセクションには、インストール処理を補足する追加情報が含まれます。これには、以下のようなものがあります。

- 高可用性を構成する設定可能なパラメータについて説明するテーブル。
- 既知の問題。

高可用性を構成する設定可能なパラメータ

以下のテーブルは、高可用性を構成する設定可能なパラメータを示します。
[管理]-[サイト設定]-[詳細]-[設定]からパラメータにアクセスし、エンティティを選択します。パラメータは、新規インストールおよびアップグレードの両方が対象です。

エンティティ	値
SMI アプリケーション サーバ	アプリケーション サーバ内の Tomcat 共有ネットワーク IP アドレス
管理	アプリケーション サーバ内の Tomcat 共有ネットワーク IP アドレス
ACE2	アプリケーション サーバの共有アドレス
アダプタ ウィザード	アプリケーション サーバの共有アドレス
キュー (MSMQ マシンの現在のステータス、ダッシュボード MSMQ マシン、デフォルト MSMQ マシン)	アプリケーション サーバの共有アドレス
レポート	共有ストレージフォルダ/ブックレットのパスの場所
システム	WEB NLB アドレス

既知の問題

高可用性がコンテンツ転送機能(コンテンツ転送、インポート、エクスポート、パッケージ)をサポートしないという既知の問題があります。

解決策として、以下の手順に従って特定の **Web** サーバと直接的に連動させます。この **Web** サーバが失敗した場合、設定を変更して別のサーバと連動させます。

1. コンテンツ転送用に指定された **Web** サーバのうちいずれかを選択して、特定のサーバを設定します。ロード バランサからのみでなく、直接アクセス可能であることを確認します。
2. 選択された **Web** サーバ上で、Oblicore – Oblisync on JBoss アプリケーションサーバをオンにして、[自動]に設定します。
3. **Web** ブラウザが選択された **Web** サーバ上の JBoss サービスを指すよう設定します。
4. CA Business Service Insight UI から、[管理]-[サイト設定]-[詳細]-[設定]-[コンテンツ転送]をクリックします。
5. コンテンツ転送サーバのパラメータ値が、手順 1 で選択されたサーバを指すように変更します。次の形式を使用します：
`http://ServerName:8180/ObliSyncApi/services/ObliSync.wsdl`
6. データベース内の次のパラメータを設定します: `t_system_configurations`。

エンティティ	値
configuration_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Configuration¥
input_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥
log_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Log¥
output_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥
temp_directory	<インストール ディレクトリ>Packages¥Temp¥

注: パッケージがエクスポート済みである場合、失敗したサーバから別のサーバにパッケージを移動させます。

第 8 章: サイレント インストール

このセクションでは、サーバおよびクライアントのサイレント インストールの手順を説明します。

サイレント インストールでは、インストール中にメッセージまたはウィンドウが表示されません。代わりに、サイレント インストールでは応答ファイルからの入力を読み取るため、ユーザの入力は必要ありません。

特定の CA Business Service Insight サーバ (たとえば Web サーバ) をインストールするために各サーバ応答ファイルが使用され、それには .iss 応答ファイルに詳細が記述された機能のセットが含まれます。たとえば、**My_Web_Server_File.iss** などです。特定のファイルを使用し、応答ファイルに記録されている機能以外はインストールまたは変更できません。

.iss 応答ファイルを使用して、ファイル内に記述されている特定の機能を持つサーバをインストールできる回数には、制限がありません。別の機能または別のタイプの CA Business Service Insight サーバをインストールするには、応答ファイルを使用して別の .iss ファイルを作成します。

注: CA Business Service Insight インストール フォルダには、.iss ファイルの例が含まれます。これらのファイルは、例にすぎません。CA Technologies では、実際のサイレント インストールのためにこれらのファイルを編集したり使用したりすることは推奨していません。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールおよび地域の設定](#) (P. 100)

[サーバのサイレント インストール](#) (P. 100)

[アプリケーション サーバ サイレント インストール \(アップグレード\)](#) (P. 109)

[クライアントのサイレント インストール](#) (P. 113)

インストールおよび地域の設定

地域と言語の設定が英語以外のときに、インストール コマンドが変更されてインストールが中断する場合があります。

地域と言語の設定が英語以外のときは、一時的に設定を[英語(米国)]に変更し、以下のインストール手順に従ってください。

1. **CA Business Service Insight** をインストールする前に、地域の設定を[英語(米国)]に変更します。
2. このガイドに記載されている手順に従ってインストールします。
3. 再起動します。
4. 地域の設定を元に戻します。
5. 再起動します。
6. **CA Business Service Insight** を使用します。

サーバのサイレント インストール

サーバのサイレント インストールでは、**InstallShield** サイレント応答ファイル(.iss ファイル)から入力を受信されます。**InstallShield** のサイレント インストールは応答ファイルから入力を読み取り、ユーザからの入力なしでインストールを実行します。.iss ファイルの内部形式は .ini ファイルと似ていますが、拡張子は .iss です。

このセクションでは、新規インストールのサーバ サイレント インストールについて説明します。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

サーバ応答ファイルの記録

このセクションでは、サーバ応答ファイルを記録する方法について説明します。サーバ応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレントインストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

例: サーバ応答ファイルの記録

すべてのインストール ダイアログ ボックスに対する応答を記録するために、以下のコマンドをコマンド ラインから入力します。InstallShield により、設定の選択内容がすべて **Setup.iss** ファイルに記録され、デフォルトで **Windows** フォルダに配置されます。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r
```

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド **Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss"** を実行します。

例: **Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r /f1"c:¥Silent¥my_server_answer_file.iss"**.

注: サーバ機能を変更するには、別のサーバ応答ファイルを記録します(「[機能の変更](#) (P. 104)」を参照)。

サーバ応答ファイルの例

応答ファイルの例の内容を以下に示します。サンプル応答ファイルが
Server/Silent サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-DlgOrder]
Dlg0={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0
Count=12
Dlg1={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0
Dlg2={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdOrganizationDlg-0
Dlg3={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SetupType2-0
Dlg4={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdAskDestPath-0
Dlg5={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-TypicalFeatureInstallDlg-0
Dlg6={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0
Dlg7={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SelectDir-0
Dlg8={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunDBInstallDlg-0
Dlg9={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0
Dlg10={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-MessageBox-0
Dlg11={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdOrganizationDlg-0]
ORGANIZATIONNAME=CA
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SetupType2-0]
Result=304
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight\
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-TypicalFeatureInstallDlg-0]
DBFEATURE=1
APPFEATURE=1
WEBFEATURE=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0]
USERNAME=ISTA0BCMI13\Administrator
PASSWORD=my_password
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SelectDir-0]
Result=1
szDir=C:\ins
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunDBInstallDlg-0]
SERVER_NAME=ins
DB_FILE_LOCATION=C:\ins
ORACLE_VERSION=11
DB_CHARSET=UTF8
DB_SYNONYM=Public
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-MessageBox-0]
Result=1
```

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
```

会社名の変更

このセクションでは、手動での会社名の入力または変更の方法について説明します。会社名はログオン中に使用されます。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdOrganizationDlg-0]
ORGANIZATIONNAME=<組織名>
2. パラメータ <組織名> を、会社名に変更します。

ディレクトリの変更

このセクションでは、インストール ディレクトリを手動で別のディレクトリに変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}]-SdAskDestPath-0]
szDir=<ドライブおよびフォルダ>
2. パラメータ <ドライブおよびフォルダ> を目的のドライブおよびフォルダに変更します。

機能の変更

このセクションでは、機能の変更応答ファイルを作成して使用することにより、既存のインストールでの CA Business Service Insight の機能を変更する方法について説明します。

例: 機能の変更ファイルの記録

機能の変更に関する応答を記録するために、コマンドラインから以下のコマンドを入力します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて **Setup.iss** ファイルに記録され、デフォルトで **Windows** フォルダに配置されます。

注: 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss".
```

例:

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r f1"c:¥Silent¥change_features_server.iss"
```

注: 特定のインストールの機能を変更するには、別のサーバ応答ファイルを記録します。

注: 応答ファイルは各インストールに固有のもので、各ファイルに含まれる特定の機能セットのみをインストールまたは削除することができます。

ユーザ名とパスワードの変更

このセクションでは、ユーザ名とパスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdLogonUserInfoInformation-0}
 USERNAME=<サーバ名>¥<ユーザ名>
 PASSWORD=<パスワード>
2. パラメータ <サーバ名>¥<ユーザ名> を、目的のユーザ名に変更します。
 注: ドメイン アカウントを使用している場合は、パラメータ USERNAME にドメイン名を指定します。
3. パラメータ <パスワード> を、目的のパスワードに変更します。

データベース パラメータの変更

このセクションでは、データベース パラメータを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。SelectDir ラインが表示されるのは、最初のインストール時に[参照]ボタンを選択した場合に限ります。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdAskDestPath-0}]
```

```
szDir=<ドライブおよびフォルダ>
```

注: 記録中に[参照]を選択する場合、szDir 値を更新して DB_File_Location 値と同じにします。

```
SERVER_NAME=<DB サービス名>
```

```
DB_FILE_LOCATION=<ドライブおよびフォルダ>
```

```
ORACLE_VERSION=<10 または 11>
```

```
DB_CHARSET=<UTF8 または WE8MSWIN1252>
```

```
DB_SYNONYM=<Public または Private>
```

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdStartCopy-0}]
```

```
Result=1
```

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-MessageBox-0}]
```

```
Result=1
```

2. パラメータ <DB サービス名> を目的のデータベース サービス名に変更します。
3. パラメータ <ドライブおよびフォルダ> を目的のデータベース ファイル配置場所に変更します。

注: SelectDir セクションおよびデータベース ファイル配置場所で、パラメータ <ドライブおよびフォルダ> を変更します。

注: [データベース フォルダの場所]のパスには ASCII 文字のみを含めることができます。その他の文字は使用できません。ASCII 文字のみを使用できます。

4. Oracle バージョンは、10 または 11 のどちらかに変更できます。
5. デフォルトのデータベース サイズは事前に決定済みです。
6. デフォルトの文字セットは UTF8 です。この値は WE8MSWIN1252 に変更できます。
7. デフォルトのデータベース シノニムは Public です。この値を Private に変更できます。

再起動オプションの変更

このセクションでは、再起動オプションを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
2. デフォルトの `bootoption` 値は 3 です。この場合は、インストールが終了すると、自動的に強制再起動が実行されます。手動で再起動する場合は、このパラメータ値を 0 に変更します。

サイレントモードでのサーバのインストールの実行

このセクションでは、サイレントモードでサーバのインストールを実行する方法について説明します。サイレントモードはユーザ入力が必要としません。

以下の手順に従います。

1. コマンドラインから以下のコマンドを実行します。
`Cloud_Insight_Server_8.2.exe /s /f1"%windir%\%setup.iss.`
注: /f1 スイッチには、応答ファイルの場所を指定します。ログファイル (`setup.log`) が生成され、設定のステータスを含む設定情報が記載されます。
2. 設定が成功しなかった場合は、「ログファイルの戻り値」を参照します。テーブルに従って `Setup.iss` ファイルを修正してから、手順 1 を繰り返します。

インストール後の作業

インストールの終了後、`Setup.log` の `[ResponseResult]` セクション内の `ResultCode` 値を検証して、サイレント設定に成功したかどうかを確認できます。`InstallShield` により、`ResultCode` キー名の後に適切な戻り値が書き込まれます。

後続のセクションでは、ログの読み取り方法と解釈方法について説明します。

ログ ファイルの設定

Setup.log ファイルは **ResponseResult** ファイルで構成されます。このファイルには、サイレント設定の成功または失敗を示す結果コードが含まれます。
[ResponseResult] セクション内の **ResultCode** キー名に整数値が割り当てられます。InstallShield のサイレント設定に成功したことを表す Setup.log ファイルの内容は以下のとおりです。

```
[ResponseResult]  
ResultCode=0
```

ログ ファイルの戻り値

InstallShield により、ResultCode キー名の後に以下のいずれかの戻り値が配置されます。

整数値	ResultCode キー名
0	成功
-1	一般的なエラー
-2	無効なモード
-3	必要なデータが Setup.iss ファイルに記載されていない
-4	メモリの空き容量が十分でない
-5	ユーザが存在しない
-6	応答ファイルに書き込めない
-7	ログ ファイルに書き込めない
-8	InstallShield サイレント応答ファイルへのパスが無効である
-9	リスト タイプ (文字列または数値) が無効である
-10	データ型が無効である
-11	設定時の不明なエラー
-12	ダイアログ ボックスが適切でない
-51	指定のフォルダを作成できない
-52	指定のファイルやフォルダにアクセスできない
-53	無効なオプションが選択されている

アプリケーション サーバ サイレント インストール(アップグレード)

サーバのサイレント インストールでは、InstallShield サイレント応答ファイル(.iss ファイル)から入力を受信されます。InstallShield サイレント インストールにより、応答ファイルから入力を読み取られ、ユーザ入力なしでインストールが実行されます。応答ファイルの形式は .ini ファイルと類似していますが、拡張子が .iss になります。

このセクションでは、アプリケーションおよび Web サーバのアップグレードのためのサーバ サイレントインストールについて説明します。

注: サイレント インストールは、通常のインストールにしか使用できません。

サーバ応答ファイルの記録

このセクションでは、サーバ応答ファイルを記録する方法について説明します。サーバ応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレントインストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

例: サーバ応答ファイルの記録

コマンドラインから以下のコマンドを実行します。

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて Setup.iss に記録され、デフォルトで Windows フォルダに配置されます。

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド `Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss"` を実行します。

例:

```
Cloud_Insight_Server_8.2.exe /r /f1"c:¥Silent¥server.iss"
```

サーバ応答ファイルの例

応答ファイルの例を以下に示します。サンプル応答ファイルが **Server/Silent** サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-DlgOrder]
Dlg0={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0
Count=6
Dlg1={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0
Dlg2={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0
Dlg3={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0
Dlg4={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0
Dlg5={6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdWelcome-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLicense2-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0]
RUN_MIGRATION=<0 または 1>
SERVER_NAME=<DB サービス名>
SCHEMA_USER_NAME=<DB ユーザ名>
SCHEMA_PASSWORD=<DB ユーザ パスワード>
SYS_PASSWORD=<DB SYS ユーザ パスワード>
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0]
USERNAME=<サーバ名>¥<ユーザ名>
PASSWORD=<パスワード>
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdStartCopy-0]
Result=1
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdFinishReboot-0]
Result=6
BootOption=3
```

マイグレーションの実行

このセクションでは、サーバ応答ファイル サイレントアップグレードでデータベースをマイグレート(更新)する方法について説明します。データベースは、現在の CA Business Service Insight バージョンと互換性を持つためにアップグレードする必要があります。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-RunMigrationScriptDlg-0]
RUN_MIGRATION = <0 or 1>
2. データベースをマイグレートしないようにするには、run_migration パラメータの値を 0 に変更します。データベースをマイグレートするには 1 に変更します。

サーバ名の変更

このセクションでは、サーバ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
SERVER_NAME=<DB サービス名>
2. 値 <DB サービス名> をサーバ名に変更します。

スキーマ ユーザ名の変更

このセクションでは、スキーマ ユーザ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
SCHEMA_USER_NAME=<DB ユーザ名>
2. 値 <DB ユーザ名> を、目的のスキーマ ユーザ名に変更します。

スキーマ パスワードの変更

このセクションでは、スキーマ パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`SCHEMA_PASSWORD=<DB ユーザ パスワード>`
2. 値 `<DB ユーザ パスワード>` を、目的のスキーマ パスワードに変更します。

システム パスワードの変更

このセクションでは、システム パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`[SYS_PASSWORD=<DB SYS ユーザ パスワード>]`
2. パラメータ `<DB SYS ユーザ パスワード>` を、目的のシステム パスワードに変更します。

ユーザ名の変更

このセクションでは、ユーザ名を手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
`[{6F05CFDE-F12C-4928-B49D-4432BC307C16}-SdLogonUserInformation-0]
USERNAME=<サーバ名>¥<ユーザ名>`
2. パラメータ `<サーバ名>¥<ユーザ名>` を、目的のユーザ名に変更します。

パスワードの変更

このセクションでは、パスワードを手動で変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルの以下のセクションに移動します。
[PASSWORD=<パスワード>]
2. パラメータ <パスワード> を、目的のパスワードに変更します。

クライアントのサイレント インストール

クライアントのサイレント インストールでは、InstallShield サイレント応答ファイル (.iss ファイル) から入力を受信し、ユーザ入力なしでインストールを実行します。応答ファイルの形式は .ini ファイルと類似していますが、拡張子が .iss になります。

クライアント応答ファイルの記録

このセクションでは、クライアント応答ファイルを記録する方法について説明します。応答ファイルには、記録されたインストール中に選択された内容へのすべての応答が含まれます。サイレント インストールでは、通常のインストール処理でのダイアログ ボックスへのユーザ入力の代わりに、記録された応答を入力として使用します。

例: クライアント応答ファイルの記録

クライアント インストール ダイアログ ボックスに対する応答を記録するために、以下のコマンドをコマンドラインから入力します。InstallShield により、設定の選択内容がすべて **Setup.iss** ファイルに記録され、デフォルトで **Windows** フォルダに配置されます。

```
CloudInsight8.2_Client.exe /r
```

InstallShield により、設定の選択内容がすべて **Setup.iss** に記録され、ファイルはデフォルトで **Windows** フォルダに配置されます。

注: (オプションの手順) 応答ファイルのデフォルトの名前および場所を使用しないようにするには、コマンド **CloudInsight8.2_Client.exe /r /f1"<location and name of answer file>.iss"** を実行します。

例:

```
CloudInsight8.1_Client.exe/r /f1"c:¥Silent¥client.iss"
```

クライアント応答ファイルの例

クライアント応答ファイルの例を以下に示します。サンプル応答ファイルが Server/Silent サンプル ファイル フォルダに別途用意されています。

```
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-DlgOrder]
Dlg0={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdWelcome-0
Dlg1={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdLicense2-0
Dlg2={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0
Dlg3={8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdFinish-0
Count=4
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdWelcome-0]
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdLicense2-0]
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\
Result=1
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdFinish-0]
Result=1
bOpt1=0
bOpt2=0
```

デスティネーションパスの変更

このセクションでは、クライアント デスティネーションパスを手動で別のパスに変更する方法について説明します。

以下の手順に従います。

1. 応答ファイルを開き、以下のセクションに移動します。

```
[{8052F2E0-6031-4985-A87A-E10E388AF1AF}-SdAskDestPath-0]
szDir=C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\
Result=1
```
2. パス「C:\Program Files\CA\Cloud Insight\Client\」を希望のパスに変更します。

サイレント モードでのクライアントのインストールの実行

このセクションでは、サイレント モードでクライアントのインストールを実行する方法について説明します。サイレント モードはユーザ入力が必要としません。

以下の手順に従います。

1. コマンド ラインを開き、以下のコマンドを実行します
`Cloud_Insight_Server_8.2/s /f1"%windir%setup.iss command.`

注: /f1 スイッチには、応答ファイルの場所を指定します。「**setup.log**」というログ ファイルが生成され、設定に成功したかどうかなどの設定情報が記載されます。

2. 設定に成功していない場合は、もう一度コマンドを実行します。

付録 A: MS Word アドイン

ローカルの Word 2010 上に [CA BSI] タブが表示されない場合、その機能を使用するために MS Word アドインをインストールする必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[MS Word アドインのインストール](#) (P. 117)

MS Word アドインのインストール

MS Word アドオンに関する以下の手順に従います。

1. CA Business Service Insight インストール フォルダから、CA BSI Booklet Addon.exe ファイルをダブルクリックします。

インストール ウィザードが起動します。

2. 画面上の指示に従ってください。
3. Word を起動します。

新しい [CA BSI] タブがリボンに表示されます。

注:

1. クライアント マシンに .NET 4 がインストールされていない場合、インストール ウィザードは停止します。ウィザードを再起動するには、.NET 4 をインストールし、実行可能ファイルを再度ダブルクリックします。
2. インストール リンクは、CA Business Service Insight Web UI 上にもあります。
 - a. [ブックレットのプロパティ] ページの [レポート]
 - b. [ドキュメント詳細] ページの [ドキュメントリポジトリ]
 - c. [添付ファイル詳細] ページの [契約の添付ファイル]

付録 B: Windows 2008 Server R2 に関する重要な情報

このドキュメントには、このリリースに関する重要な情報が含まれており、以下のトピックが含まれます。

- 前提条件

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールおよび地域の設定](#) (P. 119)

[前提条件](#) (P. 119)

インストールおよび地域の設定

地域と言語の設定が英語以外のときに、インストール コマンドが変更されてインストールが中断する場合があります。

地域と言語の設定が英語以外のときは、一時的に設定を[英語(米国)]に変更し、以下のインストール手順に従ってください。

1. CA Business Service Insight をインストールする前に、地域の設定を[英語(米国)]に変更します。
2. このガイドに記載されている手順に従ってインストールします。
3. 再起動します。
4. 地域の設定を元に戻します。
5. 再起動します。
6. CA Business Service Insight を使用します。

前提条件

このセクションでは、Windows 2008 Server R2 に CA Business Service Insight 8.1 をインストールする前に必要となる前提条件のリストを示します。

IIS (Internet Information Services) のインストールと設定

CA Business Service Insight 8.1.1 をインストールする前に、IIS (Internet Information Services) バージョン 7.5 を Web サーバにインストールします。すべての IIS 構成の前提条件を使用します (IIS Web サイトを参照してください)。

IIS 構成

Web サーバの IIS 役割サービスとして以下の役割サービスをインストールします。

- HTTP 共通機能
 - アプリケーション開発
 - ASP
 - ASP.NET
 - COM+
 - 既定のドキュメント
 - ディレクトリの参照
 - HTTP エラー
 - ISAPI 拡張機能
 - ISAPI フィルタ
 - .NET 拡張機能
 - 静的コンテンツ
- 健全性と診断
 - 要求のフィルタリング
 - 管理ツール
 - IIS 管理コンソール
 - IIS 6 管理互換
 - IIS 6 メタベース互換
 - IIS 6 WMI 互換
 - IIS 6 スクリプト ツール
 - IIS 6 管理コンソール

付録 C: Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストール

このセクションでは、Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストールについて説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Linux インストール](#) (P. 121)

Linux インストール

このセクションでは、Linux システムに CA Business Service Insight データベースをインストールする方法について説明します。

注: Linux 上にデータベースをインストールする前に、O/S レベルで oracle ユーザに接続します (main.bat を root ユーザで実行しないでください)。

DB サーバへのメディアのダウンロード

DB サーバへのメディアのダウンロード

1. CA サポート Web サイト(support.ca.com)からメディアをダウンロードします。
2. メディアを解凍します。
3. テキストファイルの整合性が破損しないように、ファイルを CD に焼くか、または cd として開きます。
 - a. あるいは、ISO を Linux サーバにコピーし、`mount -o loop` コマンドを使用して整合性を確認します。または
 - b. Windows から Linux にコピーする適切な FTP または SCP ツールを使用して、`Server¥program files¥CA¥Cloud Insight¥Setup¥InstallDB` フォルダを転送します。
4. バイナリ FTP を使用して、メディアを Linux DB サーバに転送します。

注: 転送にバイナリ FTP を使用できない場合は、ファイルを UNIX 形式に変換します。

TNSNames のセットアップ

1. tnsnames.ora ファイルを更新して、使用されるデータベースおよび sid (oblicore) のエントリを設定します。

セットアップ

ファイル変換(オプション)

1. ファイルがバイナリバージョンで転送されなかった場合は、必要なファイルを UNIX 形式に変換します。

```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee
```

```
dos2unix Setup/InstallDB/Main.sh
dos2unix Setup/InstallDB/start_parameters.ini
dos2unix Setup/InstallDB/Build_Schema/schema_build.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/makedir.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/CreateInstance.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_DB/PostCreateInstance.sh
dos2unix Setup/InstallDB/Build_TBS_Users/tbs_users_build.sh
```

ファイル権限の更新

1. .sh ファイルに実行権限を設定します。

```
find . -name "*.sh" | xargs -n1 chmod u+x
```

インストール サブスクリプトの修正

インストール サブスクリプトの修正

```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB/Build_DB
```

1. PostCreateInstance.sh ファイルを開きます。
2. PostCreateInstance.sh ファイル内のこれらの行を置き換えます。

```
If [ $ORACLE_VERSION = 9 ]
then SQL_FILE=alter_system_large_9.sql
else SQL_FILE=alter_system_large_10_11.sql
```

以下の行に置き換えます。

```
If [ $ORACLE_VERSION = "9" ]
then SQL_FILE=alter_system_large.sql
else SQL_FILE=alter_system_large.sql
```

インストール

インストール

1. ログインして **oracle** ユーザになります。
2. 以下のコマンドを入力します。


```
cd /u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB
```

 - a. **start_parameters.ini** ファイルを編集します(実際の **Client dev** については下記を参照)。

```
[DataBaseDetails]
OBLICORE_ROOT=/u03/oradata
DB_NAME=Oracle
ORACLE_HOME=/u01/app/oracle/product/10.2.0/db_1
ORACLE_VERSION=10
DB_SIZE=large
SYS_PASS=sys
OBLICORE_USER=oblicore
OBLICORE_PASS=oblicore
DB_CHARSET=utf8
DB_SYNONYM=public
```

注: CERT ORACLE_HOME=c:¥oracle¥product¥11.1.0¥db_1
3. 以下のコマンドを実行します。


```
/u03/oblicore/CA_Oblicore_Guarantee/Setup/InstallDB/Main.sh
```

プロンプトに応答します。

Please select the character set to be used in your database:

 1. UTF8 (AL21UTF8)
 2. PUBLIC (WE8MSWIN1252)

For more information about selecting the character set, please see
インストール ドキュメント「Oblicore Server Installation/Installing OG 8.2 From
Scratch/Typical Installation」

Please make your selection [1/2]
4. 1. UTF8 を選択します。

プロンプトに応答します。

Please select type of synonyms to be used in your database:

 1. PUBLIC
 2. PRIVATE

For more information about selecting private or public synonyms, please see the
Installation Document, Installing OG 7.0 From Scratch/Typical Installation.
5. 1. PUBLIC を選択します。

以下のパラメータが表示されます。

```
CHARACTER_SET
OBLICORE_ROOT
ORACLE_HOME
```

```
ORACLE_VERSION
DB_NAME
DB_SIZE
SYS_PASS
OBLICORE_USER
OBLICORE_PASS
SYNONYMS_TYPE
```

6. 選択したパラメータを確認して、正しい場合は[Y]をクリックします。
7. システムによりデータベースが作成されます。

完了時に成功メッセージが表示されます。

The installation process ended successfully

クライアントの追加インストール

1. sys として新しい DB へのログインをテストします。
2. sp ファイルを \$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリにリンクします
3. /u03/oradata/oblicore/oblicoredb/admin/spfile/spfileoblicore.ora からリンクします

```
cd $ORACLE_HOME/dbs
ln -s
/u03/oradata/oblicore/oblicoredb/admin/spfile/spfileoblicore.ora ./spfileobli
core.ora
restart database.
export ORACLE_SID=oblicore
sqlplus sys/sys as sysdba
startup
```

データベースの再起動

1. export ORACLE_SID=oblicore
2. sqlplus sys/sys as sysdba
3. startup

第 9 章：インストール後に必要な作業

Windows Server 2008 R2 に CA Business Service Insight 8.2 をインストールした後、すぐにこのセクションの手順を実行します。

この操作は 1 回のみ実行が必要で、他のサーバに CA Business Service Insight をインストールする際に実行する必要はありません。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[1 層インストール \(P. 125\)](#)

[多層インストール \(P. 126\)](#)

[3 層インストール: 詳細設定 \(P. 128\)](#)

[言語の選択 \(P. 133\)](#)

1 層インストール

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2 をインストールします。
2. インストールの終盤に表示されることがある DocumentLoader エラーを無視します。
3. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のよう
に Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - a. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
[ファイル名を指定して実行]ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに以下のコマンドを入力します:
C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe
コマンド プロンプトが表示されます。
4. コマンド プロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
C:¥Windows¥Microsoft.NET¥Framework¥v2.0.50727¥regasm.exe /codebase
"%OG_HOME%¥bin¥BSI_NetUtils.dll"
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例: C:¥Inetpub¥wwwroot¥0blicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
5. サーバを再起動します。

多層インストール

多層インストールの場合、以下に説明するインストール後の手順に従います。

サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる

サーバにアプリケーション コンポーネントおよび Web コンポーネントの両方が含まれる場合：

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.1 をインストールします。（オプション [データベース ファイルのコピー] がオンになっていることを確認してください）
2. インストールの終盤に表示されることがある DocumentLoader エラーを無視します。
3. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のよう
に Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - a. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
[ファイル名を指定して実行]ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに以下のコマンドを入力します：
C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe
コマンド プロンプトが表示されます。
4. コマンド プロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
ren NetUtils.dll BSI_NetUtils.dll
C:¥Windows¥Microsoft.NET¥Framework¥v2.0.50727¥regasm.exe /codebase
"%OG_HOME%¥bin¥BSI_NetUtils.dll"
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例: C:¥Inetpub¥wwwroot¥0blicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
5. サーバを再起動します。

APP コンポーネントと WEB コンポーネントを異なるサーバにインストール

Web サーバ上

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2 をインストールします。[データベース ファイルのコピー]オプションはオンにしてください。
2. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のよう
に Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - a. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
[ファイル名を指定して実行]ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに以下のコマンドを入力します:
`C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe`
3. コマンド プロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
C:¥Windows¥Microsoft.NET¥Framework¥v2.0.50727¥regasm.exe /codebase
"%OG_HOME%¥bin¥BSI_NetUtils.dll"
StringsLoader.exe -a [言語文字列 xml ファイルへのパス]
(例: C:¥Inetpub¥wwwroot¥0blicore¥App_Data¥Resources)
cd %OG_HOME%¥Setup¥Migration¥
DocumentLoader.exe
```
4. サーバを再起動します。

APP サーバ上

1. 「インストール ガイド」の手順に従って、CA Business Service Insight 8.2 をインストールします。
2. BSI インストールの後に再起動を促すプロンプトが表示されたら、以下のよう
に Windows 32 ビット コマンド プロンプトを開きます。
 - a. [開始]-[実行]をクリックします。
[ファイル名を指定して実行]ウィンドウが表示されます。
 - b. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウに以下のコマンドを入力します:
`C:¥Windows¥SysWOW64¥cmd.exe`
3. コマンド プロンプトで、次のように入力します。

```
cd %OG_HOME%¥bin
C:¥Windows¥Microsoft.NET¥Framework¥v2.0.50727¥regasm.exe /codebase
"%OG_HOME%¥bin¥BSI_NetUtils.dll"
```
4. サーバを再起動します。

3 層インストール: 詳細設定

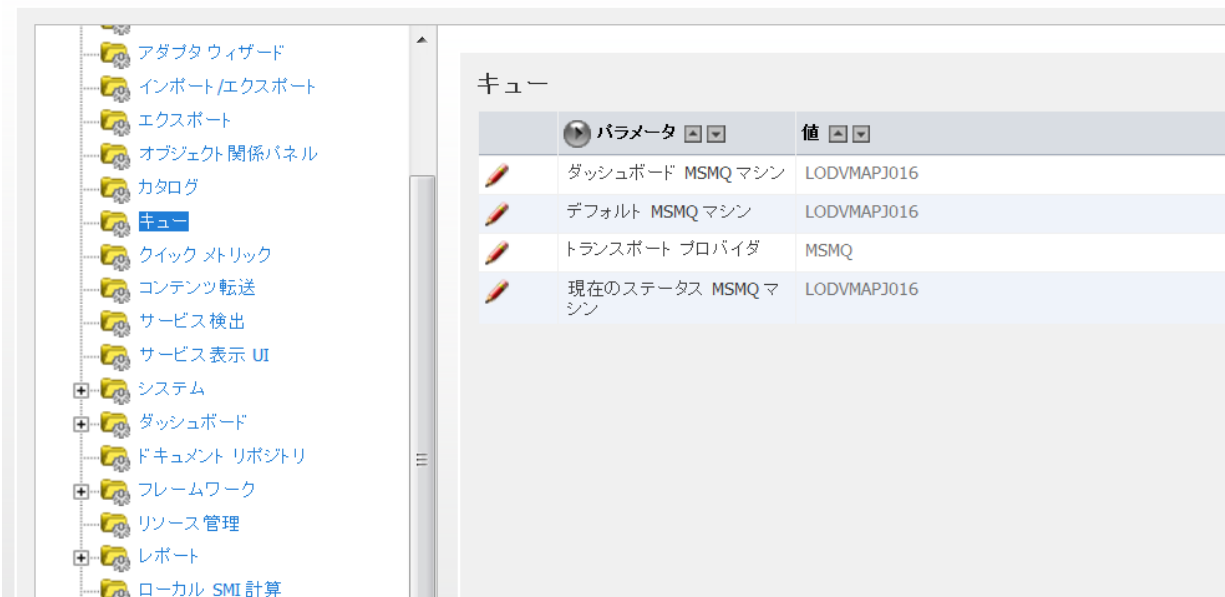
3 層環境でのインストール中、いくつかの詳細設定は自動的に更新されません。
以下のアイテムを手動で更新します。

MSMQ 構成

3 層環境では、MSMQ 設定サーバの場所は自動的にアプリケーション サーバ名で更新されません。

1. 以下に示すように、[管理]-[詳細設定]-[キュー]でキューの設定を手動で更新します。

詳細設定



The screenshot shows the 'Queue' (キュー) configuration window. On the left is a tree view with various system components, and 'キュー' (Queue) is selected. The main area displays a table of queue parameters.

パラメータ	値
ダッシュボード MSMQ マシン	LODVMAPJ016
デフォルト MSMQ マシン	LODVMAPJ016
トランスポート プロバイダ	MSMQ
現在のステータス MSMQ マシン	LODVMAPJ016

ACE2 構成

3 層環境では、ACE2 サーバの場所は自動的にアプリケーション サーバ名で更新されません。

1. 以下に示すように、[管理]-[詳細設定]-[ACE2]で ACE2 の設定を手動で更新します。

詳細設定



The screenshot shows the 'ACE2' configuration page. The left sidebar contains a tree view with the following items: 設定 (Settings), ACE2, Cloud Commons インタラクション, SMI アプリケーション サーバ, SMTP, アダプタ ウィザード, インポート / エクスポート, エクスポート, オブジェクト 関係パネル, カタログ, キュー, クイック メトリック, コンテンツ 転送, サービス 検出, サービス 表示 UI, システム, ダッシュボード, ドキュメント リポジトリ, フレームワーク, リソース 管理, レポート. The main area displays the 'ACE2' configuration table.

	パラメータ	値
	ACE2 サーバ	LODVMAPJ016
	ACE2 デフォルト エンジン	1
	ACE2 ポート	5645
	ACE2 有効	1
	デフォルト PSL インスタンス	0
	ワーカー統計履歴期間	14
	定義済みブリッジの監視対象イベント	SLA_BRIDGE,MODULES_BRIDGE
	定義済みブリッジの監視対象イベントを有効化	Y
	最大データ イベント サイズ	100000
	自己登録を使用	0
	詳細登録の有効化	0

ダッシュボード: アドレス

3 層環境では、ダッシュボード: アドレスの設定は自動的に更新されません。

1. 以下に示すように、[管理]-[詳細設定]-[ダッシュボード]-[アドレス]で、ダッシュボード: アドレスの設定を手動で更新します。

詳細設定



ダッシュボード: 現在のステータス

3 層環境では、ダッシュボード: 現在のステータスの設定は自動的に更新されません。

1. 以下に示すように、[管理]-[詳細設定]-[ダッシュボード]-[現在のステータス]で、ダッシュボード: 現在のステータスの関連設定を手動で更新します。

詳細設定



レジストリ キー

3 層システムで Docx テンプレートを使用してブックレットをスケジュールすると、問題が発生します。以下に、レジストリ設定の変更によるこの問題の回避策を説明します。

CA Business Service Insight アプリケーション サーバにこの回避策を適用します。

1. 以下のレジストリ キーを追加します。

```
[  
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\Oblicore\Install Data\  
]  
"WWWRootFolderLocation" = "C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight"
```

注: タイプ = 文字列値

注: "Cloud Insight" フォルダの場所に一致する必要があります

2. アプリケーション サーバに、フォルダ「C:\Program Files (x86)\CA\Cloud Insight\App_Data\Schemas」を作成します。
3. Web サーバ上で、前の手順で作成されたフォルダに「C:\inetpub\wwwroot\Oblicore\App_Data\Schemas\Contract」フォルダをコピーします。

言語の選択

1. CA Business Service Insight インターフェースの言語を選択するには、[ユーザ名(組織)]メニュー項目(「ログアウト」メニュー項目の左)にマウスカーソルを移動します。

[設定]メニュー項目が表示されます。

2. [設定]をクリックします。

[ユーザプリファレンス]ダイアログボックスが表示されます。

3. [優先言語]オプションからインターフェース言語を選択します。

4. [保存]をクリックします。

メッセージが表示され、CA Business Service Insight は選択されたインターフェース言語で表示されます。選択された言語は、ユーザが変更するまでデフォルトの言語になります。

付録 D: ポートおよびプロトコル

CA Business Service Insight は任意の数のサーバに展開できる多層アプリケーションです。サーバの数は、1 つ(スタンドアロン展開)から多数(3 層、または高可用性の展開や複数のアプリケーション サーバ インスタンスの場合はそれ以上)まで自由に構成できます。

プロセス間通信は単一のサーバ展開では必ずしも重要ではありませんが、サーバ数が増加するにつれて、プロセス間通信の発生を制御して安定したアプリケーション パフォーマンスを保証するために、プロセス間通信を理解することが重要になります。

企業環境における展開では、ほとんどの場合で標準の 3 層モデルが使用され、さまざまな理由により物理サーバ間にファイアウォールが設置されているケースが多く見られます。このセクションでは、CA Business Service Insight で使用される通信の概要を説明します。さまざまな通信のプロトコルとポートについての詳細情報が示されており、ファイアウォールの設定に役立ちます。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

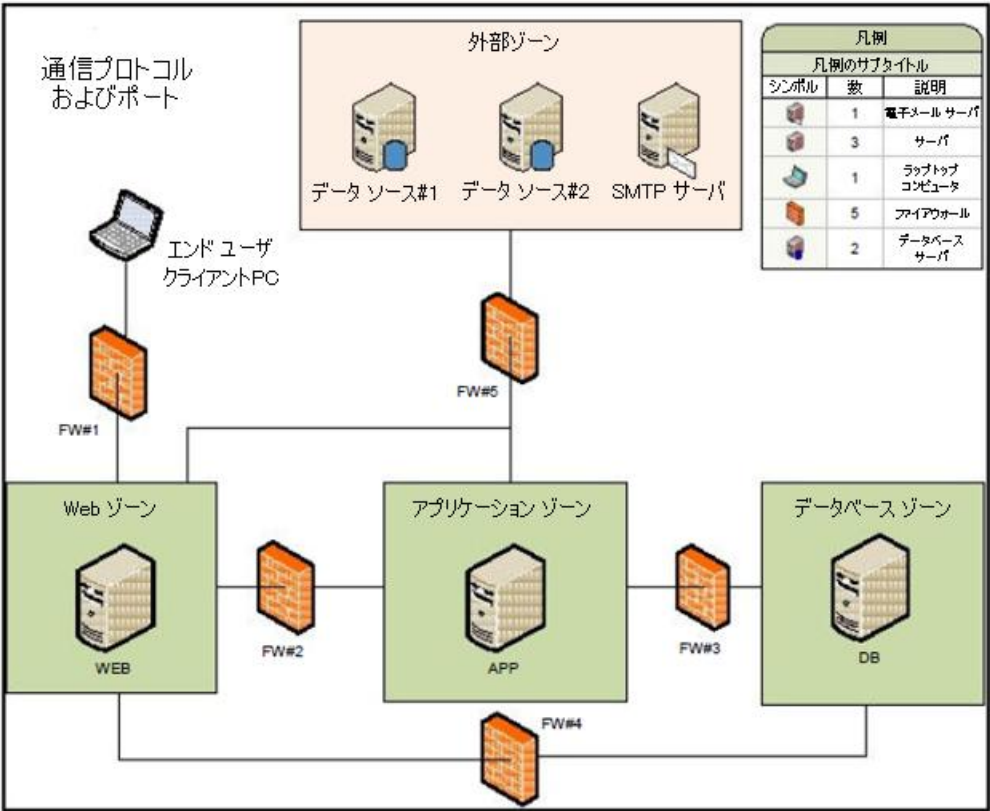
[アーキテクチャ](#) (P. 136)

[通信の詳細](#) (P. 138)

[その他の通信\(オプション\)](#) (P. 142)

アーキテクチャ

この図は、各論理アプリケーションレイヤがファイアウォール(FW)によって分離された、標準的な展開シナリオを示しています。各論理レイヤは独自のゾーン内にあり、企業環境の構成に似たものとなっています。



以下の表では、各ゾーンからの通信に関与するプロセスの詳細について説明します。

ゾーン	プロセス コンポーネント	説明
Web	IIS Web サーバ	クライアントブラウザに Web コンテンツを提供し、データベースからデータを取得します。
	COM+ コンポーネント	DB 上でアクションを実行し、データの取得および SMTP メッセージの送信を行います。
	API	受信 Web サービスリクエストを処理します。
	認証サービス (SSO/LDAP)	外部認証リクエストを処理します。

アプリケーション	アダプタリスナ サービス	アダプタ インスタンスからの受信アダプタ接続を処理します。
	アダプタ展開サービス	ローカルに展開される「管理対象」アダプタを展開および制御します。
	ログ サーバ	CA Business Service Insight COM+ コンポーネントおよびアプリケーション サービス (タスク ホスト、アラートなど)からの受信メッセージをすべてログ記録します。
	ダッシュボード サービス	ダッシュボード コンポーネントのステータスおよび結果を更新します。
	ACE エンジン (PSL)	すべてのサービスレベル結果を計算し、他の依存アプリケーション サービス (ダッシュボード、アラートなど)に情報を提供します。
	ACE2 エンジン	すべてのサービスレベル結果を計算し、他の依存アプリケーション サービス (ダッシュボード、アラートなど)に情報を提供します。
	レポート スケジューラ サービス アラート サービス (SMTP)	アプリケーション サーバから SMTP メッセージを送信します。
	アダプタ インスタンス	データソースに接続し、アダプタリスナ サービスを使用して Raw データの収集を処理します (アプリケーション サーバ上でローカルに展開されている場合)。
データベース	Oracle データベース	すべてのアプリケーション データを格納および管理します。
	データベースリスナ	データベースへの受信接続を処理します。
外部	アダプタ インスタンス	データソースに接続し、アダプタリスナ サービスを使用して Raw データの収集を処理します (リモートで展開されている場合)。
	アダプタ展開サービス	リモートで展開される「管理対象」アダプタを展開および制御します。リモートで展開される各アダプタと同じマシン上にサービスを展開します。

通信の詳細

このセクションでは、アプリケーション コンポーネント間で発生するすべての通信の詳細を説明します。

プロセス(ソース)	FW #	デスティネーション	プロトコル	デフォルトポート	方向	変更可能
Web ゾーンから発信						
IIS Web サーバ	2	ログ サーバ(アプリケーション サーバ)	TCP	4040	出力	はい
IIS Web サーバ	2	アダプタ展開 サービス(アプリケーション サーバ)	TCP	1008	両方	はい
IIS Web サーバ	2	ダッシュボード サービス(アプリケーション サーバ)	.Net Remoting	8004	両方	はい
IIS Web サーバ	5	認証 Web サービス(外部)	SOAP/HTTP	4515	両方	はい

	5	SMTP サーバ(外部)	SMTP	25	出力	いいえ
COM+ コンポーネント	4	データベースサーバ	TCP (SQL*Net)	1521	両方	はい
SMI						
Oblisync				注を参照。		
MSMQ コンポーネント	2	MSMQ サーバ	TCP	1801	両方	いいえ
			RPC	135, 2010*, 2103*, 2105*	両方	いいえ
			UDP	3527, 1801	両方	いいえ
プロセス(ソース)	FW #	デスティネーション	プロトコル	デフォルトポート	方向	変更可能
アプリケーションゾーンから発信						
レポートスケジューラおよびアラートサービス	5	SMTP サーバ(外部)	SMTPR	25	出力	いいえ

すべての Guarantee サービス(ア ラート、ダッ シュボード)	3	データベース サーバ	TCP (SQL *Net)	1521	両方	はい
アダプタ(ロー カルでホスト)	5	外部データソー ス	TCP / ファ イル		両方	はい
アダプタ(リ モートでホス ト)	5	外部データソー ス	TCP		両方	はい
アダプタリス ナ	5	リモートアダプタ インスタンス	TCP		両方	はい
ACE2 ¥ Oblisync 用 JBOSS コン ポーネント	3	データベース サーバ	TCP (SQL *Net)	1521 (注 を参 照)。	両方	はい
MSMQ コン ポーネント	2	MSMQ サーバ	TCP	1801	両方	いいえ
			RPC	135, 2101*, 2103*, 2105*	両方	* メッセー ジキューを 初期化す るときに RPC ポー トが初期選 択である場 合、ポート 番号を 11 だけインク リメントで きます。接 続中の QM はポート 135 をクエ リして 2xxx ポートを検 出します。

			UDP	3527, 1801	両方	いいえ
プロセス(ソース)	FW #	デスティネーション	プロトコル	デフォルトポート	方向	変更可能
外部ゾーンから発信						
クライアント PC (外部)	1	IIS (Web サーバ)	HTTP (または HTTPS)	80 (443)	両方	はい
アダプタ インスタンス(リモートでホスト)	5	アダプタ リスナ (アプリケーション サーバ)	TCP	ユーザ定義 **	両方	はい
外部呼び出しのアプリケーション / サーバ	5	API サービス (Web サーバ)	SOAP / HTTP	80	両方	はい

注: ** アダプタは、そのデータソース(SQL またはファイル ベースのアクセス)の要求ごとに外部アプリケーションに接続する必要があります。

注: ++ アダプタは、CA Business Service Insight 内部で定義されたポートに基づいて通信を行います(アダプタ ウィザードは、デフォルトでポート 6201 から開始して上方へポートを自動で割り当てます)。さらに、初回の通信をアダプタ インスタンスまたはアダプタ リスナのいずれか一方(アダプタ -> リスナ、またはリスナ -> アダプタ)から開始するように設定できます。この初期設定は、ファイアウォール設定で「ポートトリガ」機能を使用する場合に重要になります。

ACE2 および Oblisync

ACE2 および Oblisync (共に JBOSS 上で実行)では、以下のポートも必要です。

ACE2 プロセス	ポート	Oblisync プロセス	ポート
メッセージング	5645	http	8180
メッセージング スループット:	5655	メッセージング	5545
リモート処理	4657	メッセージング スループット:	5555
		リモート処理	4547

その他の通信(オプション)

オプション (JBoss Web コンソールで使用)		オプション (JBoss Web コンソールで使用)	
管理ネイティブ	10199	管理ネイティブ	10099
管理 -http	10190	管理 -http	10090
管理 -https	9643	管理 -https	9543
http	8280	https	8543
https	8643		

その他の通信(オプション)

これらのポートと通信は、CA Business Service Insight サーバへのアクセスで一般的に使用されます。これらのポートは、開発およびサポート用、またソースデータのファイル転送用に簡単なアクセスを提供します。

プロセス(ソース)	FW #	デスティネーション	プロトコル	デフォルトポート	方向	変更可能
外部ゾーンから発信						
クライアント PC (外部) リモート デスクトップ	1	Web サーバ & アプリケーション サーバ	RDP	3389	両方	はい
クライアント PC (外部) - ファイル システム / 共有 ++	1	Web サーバ & アプリケーション サーバ	NetBios / Samba over IP	137, 138, 139, 445	両方	はい
クライアント PC (外部) FTP / SFTP **	1	Web サーバ & アプリケーション サーバ	FTP / SFTP	21/22	両方	はい

注: ** FTP および SFTP を使用するには、製品に含まれていない FTP アプリケーションソフトウェアのインストールが必要です。SFTP は、一般的にポート 22 上の SSH を通じて実行されます。

注: ++ これらのポートは、マシンのファイル システムへのアクセスを有効にします。潜在的なセキュリティホールを開くことになるため、信頼できる領域にのみ公開する必要があります。

付録 E: CA Business Service Insight のアンインストール

このセクションでは、CA Business Service Insight をアンインストールする方法について説明します。

注: 各 CA Business Service Insight サーバ上でアンインストール操作を実行します。

以下の手順に従います。

1. コントロール パネルの[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
2. インストールが新規インストールだった場合は、[CA Business Service Insight]を選択して[削除]をクリックします。
3. コンピュータを再起動します。
4. 以前のバージョンからアップグレードしていた場合は、アンインストールするバージョン名を選択して[削除]をクリックします。
5. コンピュータを再起動します。
6. コントロール パネルを開き、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
7. 最新のサービスリリースを選択して[削除]をクリックします。
8. コンピュータを再起動します。
9. インストールされているすべてのサービスとメジャー リリースに対してステップ 6～8 を繰り返します。

付録 F: CA Technologies のデータベース オブジェクト用の命名規則ポリシー

CA Technologies の命名規則ポリシーに関するチェックリストを以下の表に示します。データベースの命名規則が CA Technologies のポリシーと異なる場合、別の命名規則を使用して適切な行に入力します。インストールを実行する前に、CA Support 部門にお問い合わせください

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
TBS_ACE_DATA_TAB_01	
TBS_ACE_INDEX_TAB_01	
TBS_CSL_DATA_TAB_01	
TBS_CSL_INDEX_TAB_01	
TBS_DASH_DATA_01	
TBS_DASH_INDEX_01	
TBS_LOB_DATA_01	
TBS_OBL_DATA_01	
TBS_OBL_INDEX_01	
TBS_PSL_DATA_TAB_01	
TBS_PSL_INDEX_TAB_01	
TBS_OBLIDBADMIN_01	
TBS_SLA_DATA_01	
TBS_SLA_DATA_02	
TBS_SLA_INDEX_01	
TBS_SLA_INDEX_02	
TBS_SMI_DATA_TAB_01	
TBS_SMI_INDEX_TAB_01	
TBS_SMIANA_DATA_TAB_01	
TBS_SMIANA_INDEX_TAB_01	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
CA Technologies ユーザ	
OBLICORE	
OBLIDBADMIN	
OBLIDBADMIN PRIVILEGES	
CONNECT TO OBLIDBADMIN	
UNLIMITED TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
EXECUTE ON DBMS_LOCK TO OBLIDBADMIN	
SELECT ANY DICTIONARY TO OBLIDBADMIN	
CREATE PUBLIC SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
DROP PUBLIC SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY SYNONYM TO OBLIDBADMIN	
CREATE TABLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE VIEW TO OBLIDBADMIN	
CREATE SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO OBLIDBADMIN WITH ADMIN OPTION	
ALTER DATABASE TO OBLIDBADMIN	
ALTER SESSION TO OBLIDBADMIN	
EXECUTE ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
SELECT ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
GRANT ANY OBJECT PRIVILEGE TO OBLIDBADMIN	
GRANT ANY PRIVILEGE TO OBLIDBADMIN	
CREATE TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
ALTER TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
DROP TABLESPACE TO OBLIDBADMIN	
CREATE USER TO OBLIDBADMIN	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
ALTER USER TO OBLIDBADMIN	
DROP USER TO OBLIDBADMIN	
CREATE ROLE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY ROLE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY ROLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TABLE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY INDEX TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY PROCEDURE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY SEQUENCE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
ALTER ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TRIGGER TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY TYPE TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY TYPE TO OBLIDBADMIN	
CREATE ANY VIEW TO OBLIDBADMIN	
DROP ANY VIEW TO OBLIDBADMIN	
USRACE	
USRCSL	
USRDASH	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
USREDR	
USRMTN	
USRPSL	
USRRPT	
USRSLA	
OBLICORE PRIVILEGES	
CONNECT TO OBLICORE	
UNLIMITED TABLESPACE TO OBLICORE	
EXECUTE ON DBMS_LOCK TO OBLICORE	
SELECT ANY DICTIONARY TO OBLICORE	
CREATE PUBLIC SYNONYM TO OBLICORE	
DROP PUBLIC SYNONYM TO OBLICORE	
CREATE ANY SYNONYM TO OBLICORE	
DROP ANY SYNONYM TO OBLICORE	
CREATE TABLE TO OBLICORE	
CREATE VIEW TO OBLICORE	
CREATE SEQUENCE TO OBLICORE	
CREATE SESSION TO USRCSL	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRCSL	
CREATE SESSION TO USRDASH	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRDASH	
CREATE SESSION TO USREDR	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USREDR	
CREATE SESSION TO USRMTN	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRMTN	
CREATE SESSION TO USRPSL	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRPSL	

CA の命名規則	お客様の命名規則
表領域	
CREATE SESSION TO USRRPT	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRRPT	
CREATE SESSION TO USRSLA	
ROLE_USR_REG_PRIVS TO USRSLA	
OBLICORE ROLE	
ROLE_USR_REG_PRIVS	
PART_MNG_PKG	Raw データのパーティション化を目的としています。システムがこの機能を使用しない場合、実行する必要はありません。
DB_MNG_FORECAST_PKG	予測計算。システムがこの機能を使用しない場合、実行する必要はありません。この機能は、T_PSL (現在アクティブでない) でパーティション化を利用するために開発されたものであるため、現在は使用されていません。
DB_MTN_PKG.LOG_PURGE	t_log テーブルの内容の消去に対応します。
DB_MTN_PKG.COLLECT_STATS	データベース統計収集
PRC_T_INTER_REGISTRATIONS_FLAT	イベントの再利用性を活用して、メトリック間のすべての (直接的および間接的な) 関係を含むテーブルを構築します。イベントの再利用性が活用されている Raw データレポートになります。

索引

1

1 層インストール - 125

3

3 層インストール: 詳細設定 - 128

6

64 ビット サーバの制限事項 - 38

A

ACE2 および Oblisync - 141

ACE2 構成 - 129

APP コンポーネントと WEB コンポーネントを異なるサーバにインストール - 127

C

CA Business Service Insight クライアントのインストール - 46

CA Business Service Insight サーバのインストール - 40

CA Business Service Insight のアンインストール - 145

CA Business Service Insight へのアップグレード - 61

CA Technologies のデータベース オブジェクト用の命名規則ポリシー - 147

CA への連絡先 - 3

D

DB サーバへのメディアのダウンロード - 121

I

IIS (Internet Information Services) のインストールと設定 - 120

L

Linux サーバへの CA Business Service Insight データベースのインストール - 121

Linux インストール - 121

LISTENER.ORA ファイル - 31

M

MS Word アドイン - 117

MS Word アドインのインストール - 117

MSMQ 構成 - 128

S

SMILoader - 53

T

TNSNames のセットアップ - 122

TSNAMES.ORA ファイル - 31

W

Web サーバ - 80

Web サーバ設定 - 96

Web サーバのアップグレード - 90

Web サーバのインストール - 82

Web サーバの前提条件 - 19

Windows 2008 Server R2 に関する重要な情報 - 119

Windows 2008 Server R2 に関する追加情報 - 21

あ

アーキテクチャ - 136

アダプタ サーバのアップグレード - 91

アダプタ サーバのインストール - 82

アダプタ サーバの設定 - 96

新しいデータベースの手動作成 - 32

アップグレード ダイアログ ボックスおよびその設定 - 64

アップグレード ログ ファイル - 70
アプリケーション サーバ - 79
アプリケーション サーバ サイレント インストール
(アップグレード) - 109
アプリケーション サーバのアップグレード - 89
アプリケーション サーバのインストール。 - 81
アプリケーション サーバの設定 - 92
アプリケーション サーバの前提条件 - 16
アプリケーション サーバの追加インストール - 43
インストール - 123
インストールおよび地域の設定 - 29, 60, 100,
119
インストール後に必要な作業 - 125
インストール後の作業 - 107
インストール後の作業(アップグレード時) - 68
インストール後の作業(新規インストール時) -
47
インストール サブスクリプトの修正 - 122
インストール ダイアログ ボックス - 33
オペレーティング システム - 19

か

開始前の確認事項 - 27, 56
会社名の変更 - 103
カスタム インストール - 72
カスタム インストール ダイアログ ボックス - 74
既知の問題 - 98
機能の変更 - 104
旧バージョンからのアップグレード - 55, 88
クライアント インストール - 標準 - 45
クライアント応答ファイルの記録 - 114
クライアント応答ファイルの例 - 115
クライアントソフトウェアの前提条件 - 25
クライアントのサイレント インストール - 113
クライアントの追加インストール - 124
言語の選択 - 53, 133
高可用性 - 77
高可用性を構成する設定可能なパラメータ - 97
コンポーネント - 45

さ

サードパーティ CD - 28
サーバ インストール - 標準 - 36
サーバ応答ファイルの記録 - 101, 109
サーバ応答ファイルの例 - 102, 110
サーバ数(トポロジ) - 36
サーバソフトウェアの前提条件 - 13
サーバにアプリケーション コンポーネントおよび
Web コンポーネントの両方が含まれる - 126
サーバのサイレント インストール - 100
サーバの設定 - 91
サーバ名の変更 - 111
サービスの停止 - 28, 60
サービスの分配 - 43
サイレント インストール - 99
サイレント モードでのクライアントのインストール
の実行 - 116
サイレント モードでのサーバのインストールの
実行 - 107
システム パスワードの変更 - 112
新規インストール - 81
スキーマ パスワードの変更 - 112
スキーマ ユーザ名の変更 - 111
設定 - 82
設定: Web サーバ - 86
設定: アダプタ サーバ - 87
設定: アプリケーション サーバ - 83
セットアップ - 122
前提条件 - 13, 81, 119
その他の通信(オプション) - 142

た

対象読者 - 11
タイムゾーン ツール - 67
多層インストール - 126
ダッシュボード: アドレス - 130
ダッシュボード: 現在のステータス - 131
追加情報 - 97
通信の詳細 - 138
ディレクトリの変更 - 103
データベース サーバの前提条件 - 14

データベース サーバ - 78
データベース ジョブの再編成 - 59
データベースの再起動 - 124
データベース パラメータの変更 - 106
デスティネーション パスの変更 - 115

は

ハードウェア前提条件 - 23
パスワード更新ユーティリティ - 71
パスワードの変更 - 113
バックアップ - 13
パッケージコンテンツ - 11
標準新規インストール - 27
複数のサーバへのアダプタの配置 - 44
複数のサーバへのインストール - 30
ポートおよびプロトコル - 135

ま

マイグレーションの実行 - 111

や

ユーザ名とパスワードの変更 - 105
ユーザ名の変更 - 112

ら

レジストリ キー - 132
ログ ファイルの設定 - 108
ログ ファイルの戻り値 - 108

漢字

概要 - 11, 78
再起動オプションの変更 - 107
標準インストール ウィンドウ - 34